令和７年度　和歌山大学　e-annual report

＜ダイジェスト版＞（分析コメント含む）

令和８年１０月

目 次

１．はじめに 2
２．入学時・入学直後の情報 3
２－１　入学者選抜の状況 3
３．在学中の情報 7
３－１　各授業科目における到達目標の達成状況 7
３－２　各授業科目における到達目標の達成状況（授業科目に関する情報） 12
３－３　学修時間 16
３－４　教員一人あたりの学生数 20
４．卒業時・卒業後の情報 21
４－１　学位の取得状況 21
４－２　学生の成長実感・満足度 23
４－３　学位プログラムを通じた資質・能力等の修得状況 28
４－４　進路の決定状況等の卒業後の状況（就職率や進学率等） 34
４－５　修業年限期間内に卒業する学生の割合、留年率、中途退学率 35
４－６　卒業生からの評価 40
４－７　卒業生に対する評価 49

１．はじめに

「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン」（平成 30 年 11 月 26 日中央教育審議会答申）において、高等教育改革の実現すべき方向性として

・高等教育機関がその多様なミッションに基づき、学修者が「何を学び、身に付けることができるのか」を明確にし、学修の成果を学修者が実感できる教育を行っていること

などが掲げられ、「学修者本位の教育の実現」が謳われています。

和歌山大学においても、本学が有する強みと特色を生かして、「何を学び、身に付けることができたのか」という学修者本位の視点に立ち、学位プログラムについて日常的な点検（モニタリング）を行うとともに、総合的な点検・評価を行い、その結果をもとに教育改善に努めています。

点検・評価を行うためのデータ・情報のうち、学生の学修成果や大学全体の教育成果に関係する情報について、『e-annual report』としてホームページで公表しています。公表に当たっては、「入学前・入学直後の情報」「在学中の情報」「卒業時・卒業後の情報」「その他の情報」に分類することで、情報の検索が容易となるよう工夫するとともに、ホームページでは最新データをご確認いただくことができます。当冊子は＜ダイジェスト版＞として年度毎に事項を抽出してとりまとめたものです。

＜和歌山大学ホームページ：e-annual report＞
https://www.wakayama-u.ac.jp/about/public_information_gallery/education-information/qualityassurance/index.html

２．入学時･入学直後の情報

２－１　入学者選抜の状況

入学者選抜については、「入学者受入れの方針」を定め、これに則して大学として求める資質・能力を有する者を入学者として適切に選抜しています。

和歌山大学学士課程　入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）

１．求める学生像

高等学校あるいはこれに相当する教育機関等における学習や活動を通して、次の知識・技能、能力、態度を有する人を求める。

（1）知識・技能
・本学での学修に必要となる知識・技能を有する人

（2）思考力・判断力・表現力
・課題解決に取り組むための基礎となる思考力・判断力・表現力を有する人

（3）主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度
・多様で広い知的関心をもち、他者と関わって、主体的に学ぼうとする意欲や態度を有する人
・身につけた知識や技能を活用し、課題解決に取り組む意欲や態度を有する人

【入学後の期待】

入学時に求められる知識・技能、能力、態度をもとに、各学部・学環の専門教育及び教養教育を学修することができるレベルにまで資質・能力を高めることを期待する。

２．入学者選抜の基本方針

本学が求める資質・能力を適切に評価するために、各学部・学環の特性を踏まえた選抜方法により実施する。

全学の「入学者受入れの方針」に加え、学部等の学位プログラム毎にも「入学者受入れの方針」を定め、これに則して入学者を選抜しています。

（参考）各学部の入学者受入れの方針
https://www.wakayama-u.ac.jp/admission/admission-policy/index.html

「入学者受入れの方針」に則した選抜が実施されているかを明らかにするため、入試方法の区分に応じた受験者数、合格者数及び入学者数等を以下に示します。

▶ **受験者数、合格者数、入学者数等について**

＜前期日程＞

一般選抜_実績一覧_学部別

学部・学環	募集人員数	志願者数	志望倍率※1	受験者数	実質倍率※2	合格者数	合格率※3	入学者数	入学率※4
教育学部	70	153	2.2	135	1.9	86	63.7%	82	95.3%
経済学部	170	435	2.6	403	2.4	197	48.9%	175	88.8%
システム工学部	170	373	2.2	342	2.0	197	57.6%	180	91.4%
観光学部	60	176	2.9	152	2.5	63	41.4%	57	90.5%
社会インフォマティクス学環	20	158	7.9	136	6.8	28	20.6%	26	92.9%
合計	**490**	**1,295**	**2.6**	**1,168**	**2.4**	**571**	**48.9%**	**520**	**91.1%**

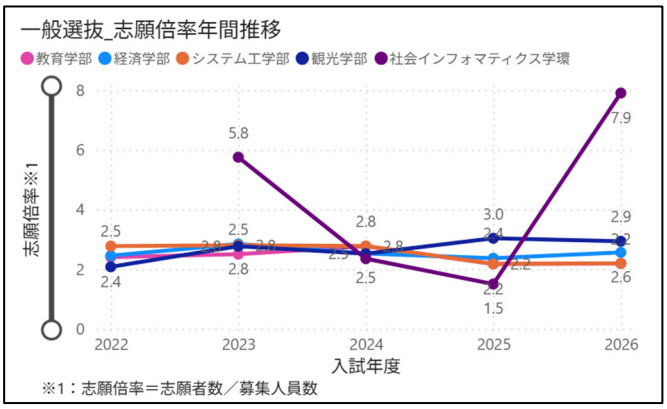
＜後期日程＞

一般選抜_実績一覧_学部別

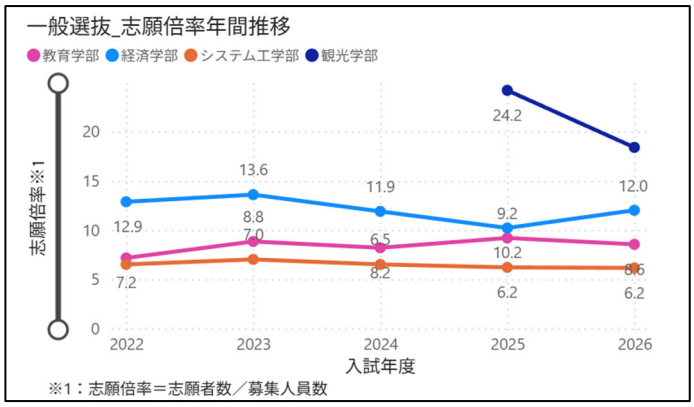
学部・学環	募集人員数	志願者数	志望倍率※1	受験者数	実質倍率※2	合格者数	合格率※3	入学者数	入学率※4
教育学部	20	171	8.6	48	2.4	24	50.0%	17	70.8%
経済学部	80	961	12.0	472	5.9	98	20.8%	78	79.6%
システム工学部	110	677	6.2	276	2.5	158	57.2%	89	56.3%
観光学部	5	92	18.4	92	18.4	7	7.6%	2	28.6%
合計	**215**	**1,901**	**8.8**	**888**	**4.1**	**287**	**32.3%**	**186**	**64.8%**

上表の各数値は、属性に該当する実数を表す。
※1：志願倍率＝志願者数／募集人員数
※2：実質倍率＝受験者数／募集人員数
※3：合格率＝合格者数／受験者数×100〔%〕
※4：入学率＝入学者数／合格者数×100〔%〕

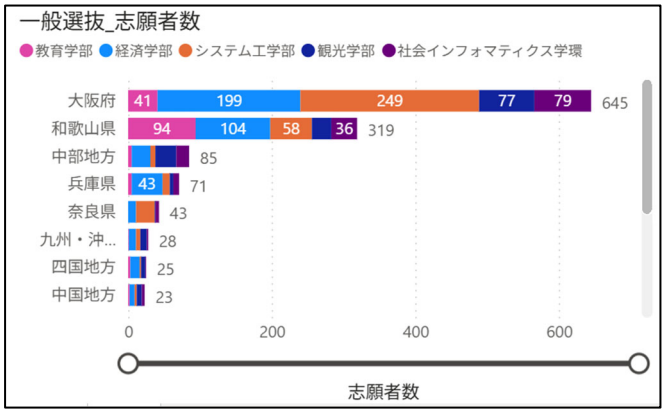
＜前期日程 志願倍率年間推移＞



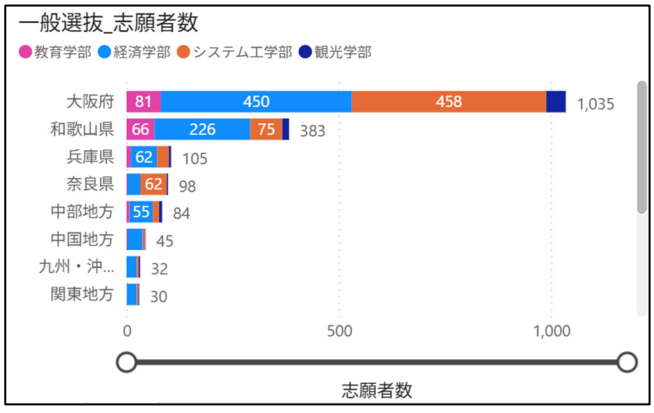
＜後期日程 志願倍率年間推移＞



＜前期日程 志願者数＞



＜後期日程 志願者数＞



【分析状況】

2026 年度入試データの分析　大学全体の総受験者数は、前期選抜は横ばい、後期選抜は増加傾向である。実際、2026 年度前期選抜の総受験者数(1168 名)を過去 4 年間(2022～2025 年)の平均値(1148 名)と比較するとほぼ横ばい(約 1.7%)である。また 2026 年度後期選抜の総受験者数(888 名)を 4 年間平均値(830 名)と比較すると約 7.1%の増加である。一方、合格者のうち入学した者の割合は、前期選抜は横ばい、後期選抜は減少傾向にある。実際、2026 年度前期選抜では 91% であり、4 年間平均値(90%)とほぼ変わらない。しかし、2026 年度後期選抜では 65% であり、4 年間平均値(73%)から約 8%減少している。「後期選抜の受験者数」の増加傾向の原因として観光学部で後期選抜が 2025 年度に再開した影響が大きく、また 2026 年度は経済学部の受験者が増加したことが挙げられる。「後期選抜の合格者のうち入学した者の割合」が減少した原因は大学入試の早期化などが考えられるが、詳しい検証が必要である。

都道府県別の入学者数の割合では、大阪府と和歌山県からの入学者数の割合が前期選抜では約 77%、後期選抜では約 80%と依然として大きい。前年度までと比較すると、前期選抜では大阪府からの入学者数の割合は横ばい(約 49%・増減-0.3%)、和歌山県からの入学者数の割合は若干減少している(約 28%・増減-3.5%)。その分、中部地方や奈良県からの入学者数の割合が若干増加している(それぞれ、約 7%・増減+1.9%; 約 4%・増減+1.3%)。後期選抜では大阪府・和歌山県からの入学者数の割合はいずれも若干減少している(それぞれ、約 58%・増減-3.4%; 約 16%・増減-3.3%)。その分、兵庫県等からの入学者数の割合が若干増加している（約 7%・増減+3.0%)。このように依然として和歌山県と大阪府からの入学者が多いが、それ以外の地域の高校生にも本学が認知されつつあると考えられる。

2025 年度の取組と 2026 年度以降の取組　2025 年度は、2025 年度入試のデータ分析結果を踏まえて、本学が求める資質・能力を適切に評価し、多様な志願者を受け入れるため、選抜方法や入学定員の検討も進めてきた。2026 年度以降も、入試データの詳細な分析を通して入試制度の検討を継続する。

志願者・入学者を確保するため、2025 年度も高校におけるガイダンスや進学相談会などへ多数参加し、本学の特色や魅力を発信することに努めた。また、大阪府・和歌山県以外からの入学者を得るための取組として、2024 年度から、大阪府・和歌山県以外の生徒も参加しやすいオンライン説明会で広報活動を行っている。2026 年度以降も、本学の特色・魅力を広く発信するため、オンライン説明会への参加やホームページによる情報発信などの広報戦略を練ることが不可欠である。

＜各学部等からの分析結果＞

学部等	分析コメント
教育学部	前期・後期とも和歌山県と大阪府からの志願者が大半を占めていることがわかる。前期においては和歌山県出身者が最も多くなっている。また、地域における教員養成を担う学部として、推薦入試において地域枠を設けている。志願倍率は入学定員を減らした 2025 年度入試において僅かの減少にとどまり、その後も大きな落ち込みなく推移している。一般入試選抜においてもより一層の志願者増加のために、アクションターム導入などの新カリキュラムの特色を入試広報等により広く丁寧に説明を続けている。

経済学部	志願倍率は、2025 年度実施分において、前年度と比較すると、学校推薦型選抜以外の選抜では微増となり、学校推薦型選抜では減少となった。一方で、志願者数の合計は増加している。なお、この傾向は受験者ベースの実質倍率においても同様である。 全体的な傾向として、一般選抜（前期日程）は 2 倍台、一般選抜（後期日程）は 5 倍台で推移している。学校推薦型選抜については、3 つの選抜がそれぞれ 2～3 倍台で推移している。実質倍率で見ると、一般選抜（前期日程）は、いずれの学校推薦型選抜よりも低い傾向にある。この背景には、近年の受験生にみられる年内入試志向の影響などがある可能性が考えられる。 これらを踏まえ、2028 年度選抜より、一般選抜の募集人員を若干削減するとともに、従来 3 つあった学校推薦型選抜を一本化し、入試制度全体の改善を進めている。
システム工学部	大阪府内や和歌山県内の高校への訪問や、生徒に向けた進路説明会を積極的に実施してきたが、2026 年度入試の志願倍率は、昨年度とほぼ同じであった。少子化に加え、2025 年度入試から前期・後期日程ともにそれぞれ入学定員を 10 名増員した影響が考えられる。また、後期日程では入学率が 2025 年度からさらに低下した。こちらは、近隣の私立大学への入学者が増えていることが考えられる。本学部を選んでもらえるよう、本学部の魅力をさらに高めるとともに、和歌山や大阪南部以外にも拡大して広報に努めたい。
観光学部	一般選抜（後期日程）については、2026 年度に志願者数・志願倍率を減らすことになった。後期日程は募集人員も少なく、再開した 2025 年度の志願者数・志願倍率が非常に高かったことが影響していると想定されることから、これらが適正化される過程にあるものと考えられる。後期日程は共通テストのみを用いた選抜であることから入学率も決して高くはないものの、志願者の受験機会増に寄与しており、今後の動向を注視していきたい。また近年、観光分野においてはインバウンド旅行者の傾向も変化しており、今後もすべての入試区分において、入試広報や選抜方法の改善を進めていきたい。
社会インフォマティクス学環	一般選抜（前期日程）について、本年度志願者は 158 名であり、昨年度(30 名)と比較して大きく増加した。大きく志願者数が増加した理由としては、1. 共通テスト科目について情報Ⅰの配点を 10 点から 100 点に変更したこと、2. 個別学力試験(数学・外国語)の配点を 500 点から 600 点に変更したこと、3. 昨年度の志願者倍率が影響したこと、4. 社会インフォマティクス学環独自説明会、進学指導担当教員向け説明会を実施、県内外の高等学校の訪問の強化や学校説明会の実施など、積極的な広報活動を実施したことなどがあげられる。今年度は、昨年度の志願倍率の影響を受けて、志願者が減少することも想定されるため、一層広報活動に力を入れていきたい。

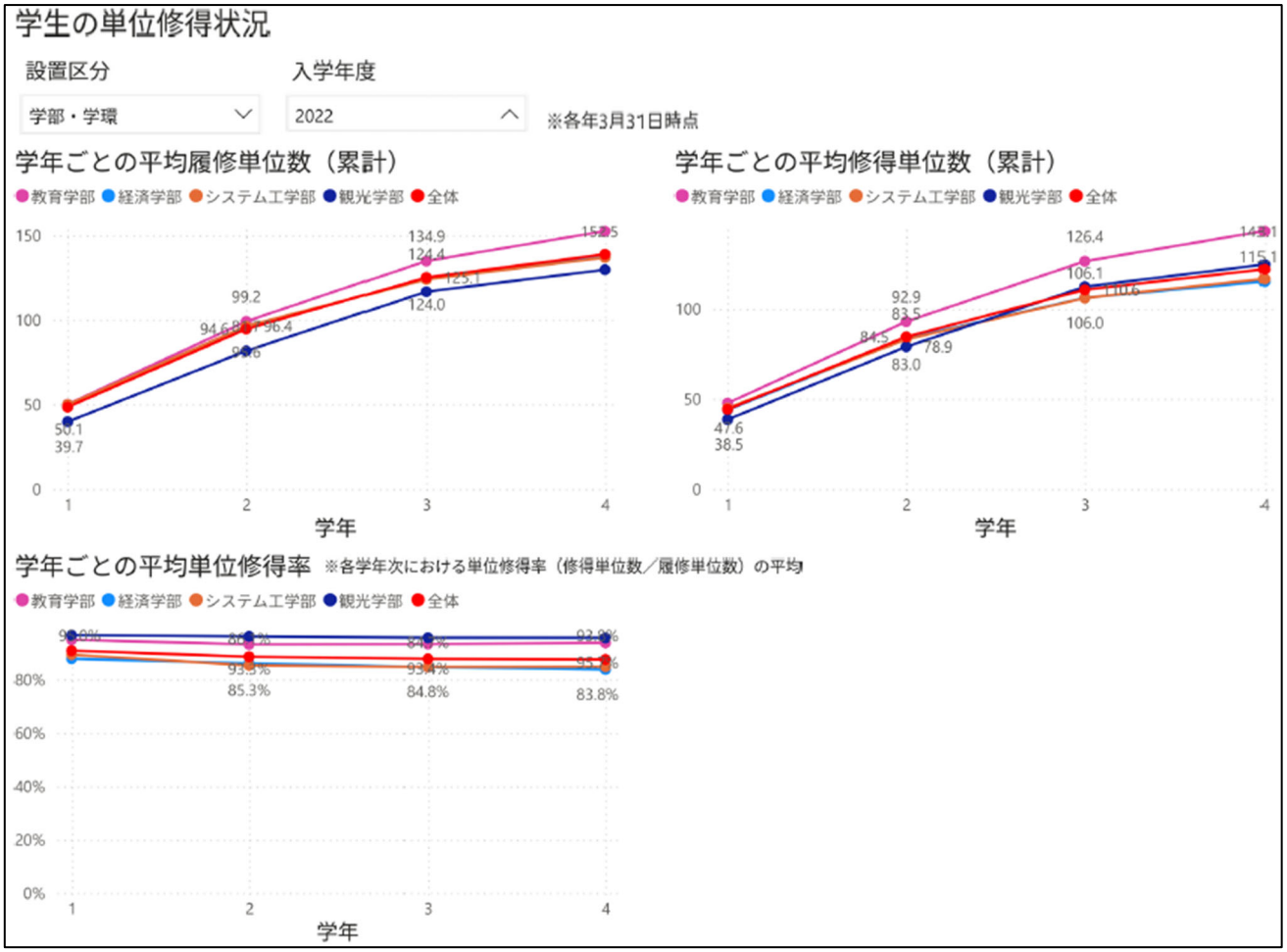
３．在学中の情報

３－１　各授業科目における到達目標の達成状況

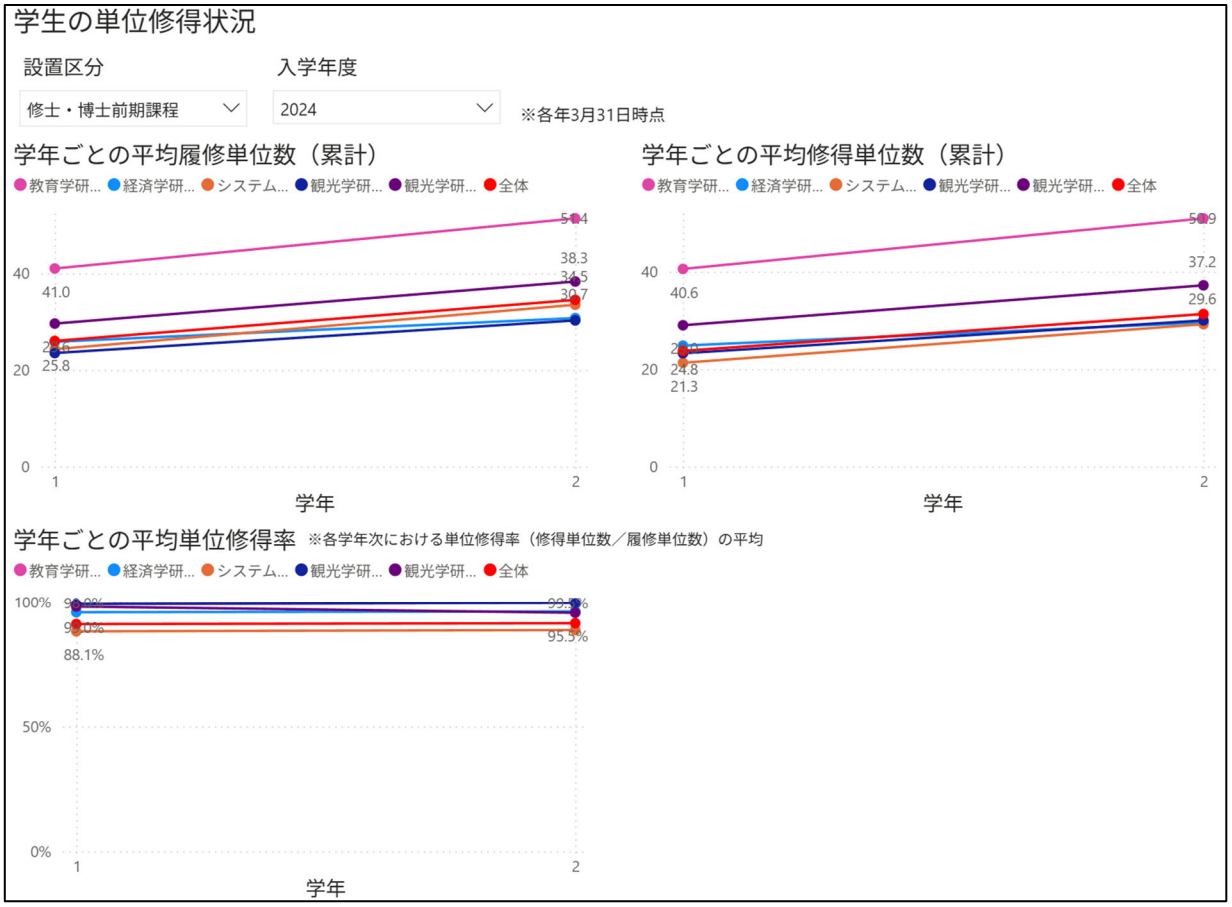
学生が、個々の授業科目の履修の結果として「卒業認定・学位授与の方針」に定められた資質・能力を獲得してゆく過程の全体的な状況を明らかにするため、入学年度別・年度毎の単位修得状況等を以下に示します。

▸ **入学年度別・年度毎の平均履修（修得）単位数について**

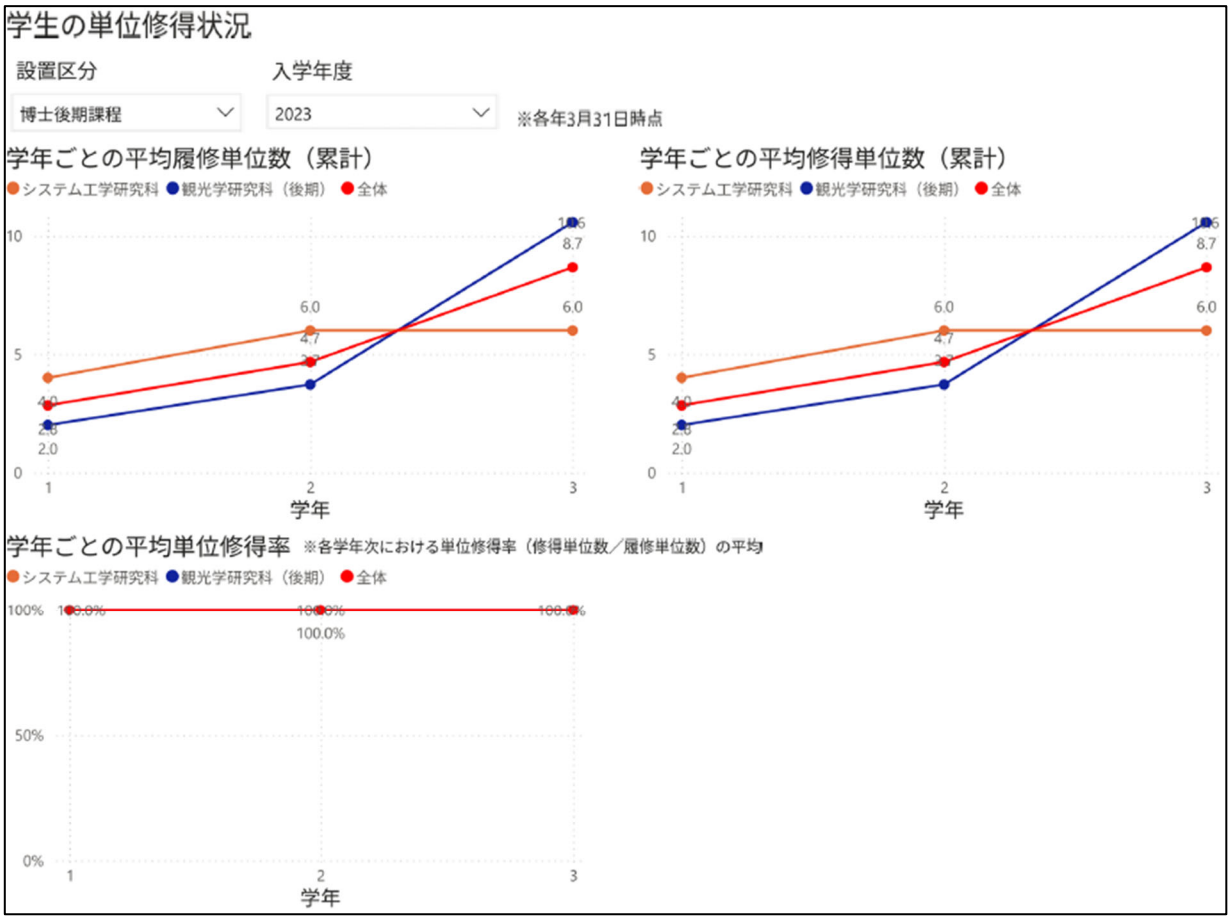
＜学部＞



＜修士・博士前期課程＞



＜博士後期課程＞



【分析状況】

各年次における履修単位数は，おおむね例年と同様の水準で推移しており，学生の履修行動に大きな変化はみられない。一方，単位修得率については，前年度とほぼ同水準を維持している部局がある一方で，約 2 ポイント低下している部局もあり，部局によって状況が分かれている。これまでの傾向としては，1 年次では部局間の差がほとんどみられず，年次が進むにつれて単位修得率のばらつきが拡大する傾向にあった。しかし，今年度は 1 年次の段階から部局間の差が確認されており，従来とは異なる状況が生じている。特に単位修得率が低下している部局については，入学直後の学修への適応や基礎学力，履修指導の状況などを確認する必要がある。あわせて，近年の入試動向や入学者層の変化との関連を分析し，初年次導入教育の内容，授業方法，学修支援体制が学生の実態に適合しているかを点検することが求められる。

研究科については，学生の単位修得数および単位修得率は概ね良好であり，授業科目の履修は順調に進んでいる。今後は，授業科目と研究指導が適切に関連付けられ，カリキュラム全体が学位授与方針に掲げる能力の修得や学位論文等の研究成果につながっているかを検証する必要がある。

＜各学部等からの分析結果＞

学部等	分析コメント
教育学部	他の学部等と比べて平均履修単位数が多い傾向にあることがわかる。また、その多さは、学年が上がるにつれ大きくなっている。それでも平均単位修得率は他学部等と同じ水準を維持している。これらはここ数年、変わらない傾向である。卒業要件としての免許状取得単位に加え、卒業後の就職（主に教員）を見通すなかで目標を明確に定めつつ複数の教員免許取得の単位を取得する傾向があり上記の結果につながったと考えられる。
経済学部	各学年の平均単位修得率は、2 年次 86.1%、3 年次 84.7%、4 年次 83.8%と、学年が上がるにつれてわずかに低下する傾向がみられる。 単位の総量は順調に積み上がるものの、上級学年ほど履修した単位に対する修得の割合がやや下がるという構造がうかがえる。これは、専門科目や選択科目が増え、難度の高い科目への履修が増える上級年次の特性を反映したものと考えられる。 他方、1 年次の単位修得率は前年度と比べて約 2 ポイント低下している。この背景の一つとして、直近では教養科目における授業参加率が低い傾向にあることが考えられ、入学直後の大学の学修スタイルへの適応や、基礎的な学修習慣の定着が十分でない学生が一定数存在する可能性がある。1 年次の修得状況はその後の学年の履修計画にも影響しうるため、要因の把握を進める必要がある。
システム工学部	平均単位修得率が 90%を下回っているが、これは必ずしも学部全体の質や学習意欲の低下を示すものではなく、厳格な単位認定を実施している結果であり、各学年におけるカリキュラム構成には問題がないと考えている。 学年進行とともに単位修得率が下がる傾向にあり、特に 4 年次には 84.9%となっている。この原因として、順調に単位修得できている学生であれば 4 年

	次には卒業研究が中心となり履修科目数が少なくなる傾向がある一方、4 年次になっても多くの科目の再履修が必要な成績不振の学生が一定数いることが考えられる。単位修得できず再履修を繰り返す学生へのフォローが重要と考えている。 なお、システム工学部は、2023 年度に 10 メジャー制から 8 メジャー制へカリキュラムを大きく変更し、さらに、履修単位数の上限を従来の 26 単位から 24 単位に減らした。今後の状況について注視していく必要があると考えている。
観光学部	学年ごとの平均履修単位数は相対的に低めの水準にあるが、平均単位修得率は高めの水準にある。履修単位数については、やや厳しめに CAP（履修単位数の上限）を設定していること、フィールドワークを実施する科目が比較的多いため履修コマ数を抑える傾向にあること、GPA の維持が意識されていること等が要因だと考えられ、学修意欲は高いものと考えられる。一方で、卒業に必要な単位数までしか履修・修得しない傾向も見受けられ、ガイダンス等において適切な履修計画について指導していきたい。
社会インフォマティクス学環	1 年生および 2 年生の平均修得単位率は 90%、3 年生は 89%を維持している。学年の進行に伴い、学修内容が高度化・複雑化する中においても、学生は自身の学修状況を把握し、それに応じて学修時間を適切に調整していることがうかがえる。今後も、履修ガイダンスや学生個別の相談会を通して、自らの学修状況の把握を促すとともに、主体的に適切な目標設定ができるよう指導・支援する。
教育学研究科	平均履修単位、平均修得単位の数が他研究科等より多く、教職実践力を獲得するという学習の目標が明確であるため集中して単位取得に向かうことができたと考えられる。さらに約半数が現職教員（県派遣等）であり現任校での課題が明確で、それに対する解決策を導き出すため自律的かつ積極的に学習に取り組んだものと考えられる。
経済学研究科	2024 年度入学者については、今年度新たに 2 年次までの推移が得られた。平均単位修得率は、1 年次の 95%台という高い水準が 2 年次もほぼ維持されており、修得は安定して高い。平均修得単位数(累計)も 1 年次から 2 年次にかけて増加し、修了に必要な単位が着実に積み上がっている。授業科目の履修が中心となる 1 年次に多くの単位を確保し、2 年次に修得すべき単位数は多くないものの、修士論文の研究指導を中心としつつ、学修に努めるよう助言し、知識の幅を広げられるよう指導を行っている。引き続き、履修指導を通じてこの高い修得水準の維持を図りたい。

システム工学研究科	前期：学生が適切に履修計画を立てられていることが、高い単位修得率につながっていると考えている。なお、研究科においては、学部のカリキュラムとは大きく異なるアプローチが採られている。具体的には、主要な講義科目に関しては、1年次の終わりまでにほとんどの学生が単位を修得しているのが特徴である。これにより、2年次に入ると修士論文の研究に重点を移しつつも知識の幅を広げるように広く学修の機会を提供している。以上からカリキュラム構成には問題がないと考えている。 後期：後期課程の人数が少ないため、各個人の動向が反映された結果と考えている。後期課程は学位論文のための研究が中心となることもあり、単位修得の面で大きな問題がある様子は見受けられない。カリキュラム構成には問題がないと考えているが、別項で述べる通り、修業年限期間内に学位を取得できるような指導を行うように努める必要があると考えている。
観光学研究科	博士前期課程・専門職学位課程とも、年ごとの平均履修単位数及び平均修得単位数の状況は、全体の数値と大きな差が見られない。いずれも授業科目の年次配当どおりの履修（修得）単位数となっている。 博士後期課程の単位修得状況に関しても、全体の数値に近い傾向であり、授業科目の年次配当どおりの履修（修得）単位数となっている。

３－２　各授業科目における到達目標の達成状況（授業科目に関する情報）

学生が単位を修得した各授業科目における到達目標の達成状況について、当該科目の到達目標、到達目標と「卒業認定・学位授与の方針」との対応関係、成績評価基準及び成績評価手法などを公表することが望ましいとされています。

本学では、これらの情報をシラバスへ記載し学生へ周知するとともに、各学期の授業評価アンケートで実施状況の確認を行っています。

・シラバスに記載する項目（和歌山大学「シラバス作成のガイドライン」より抜粋）

授業概要		授業計画詳細情報
基本情報	詳細情報	
(1)開講科目名	(15)授業の概要・ねらい	(29)回（日時）
(2)時間割コード	(16)到達目標	(30)主題と位置付け
(3)開講所属	(17)成績評価の方法・基準	(31)学習方法と内容
(4)ターム・学期	(18)教科書	(31)備考（担当）
(5)曜限	(19)参考書・参考文献	
(6)開講区分	(20)履修上の注意・メッセー ジ	
(7)単位数	(21)履修する上で必要な事項	
(8)学年	(22)履修を推奨する関連科目	
(9)主担当教員	(23)授業時間外学修（予習・復習等）の内容	
(10)授業形態	(24)その他連絡事項	
(11)教室	(25)授業理解を深める方法	
(12)開講形態	(26)オフィスアワー	
(13)ディプロマ・ポリシー情報	(27)科目ナンバリング	
(14)担当教員情報	(28)実務経験	

・授業評価アンケート対象科目数及び回答者数について

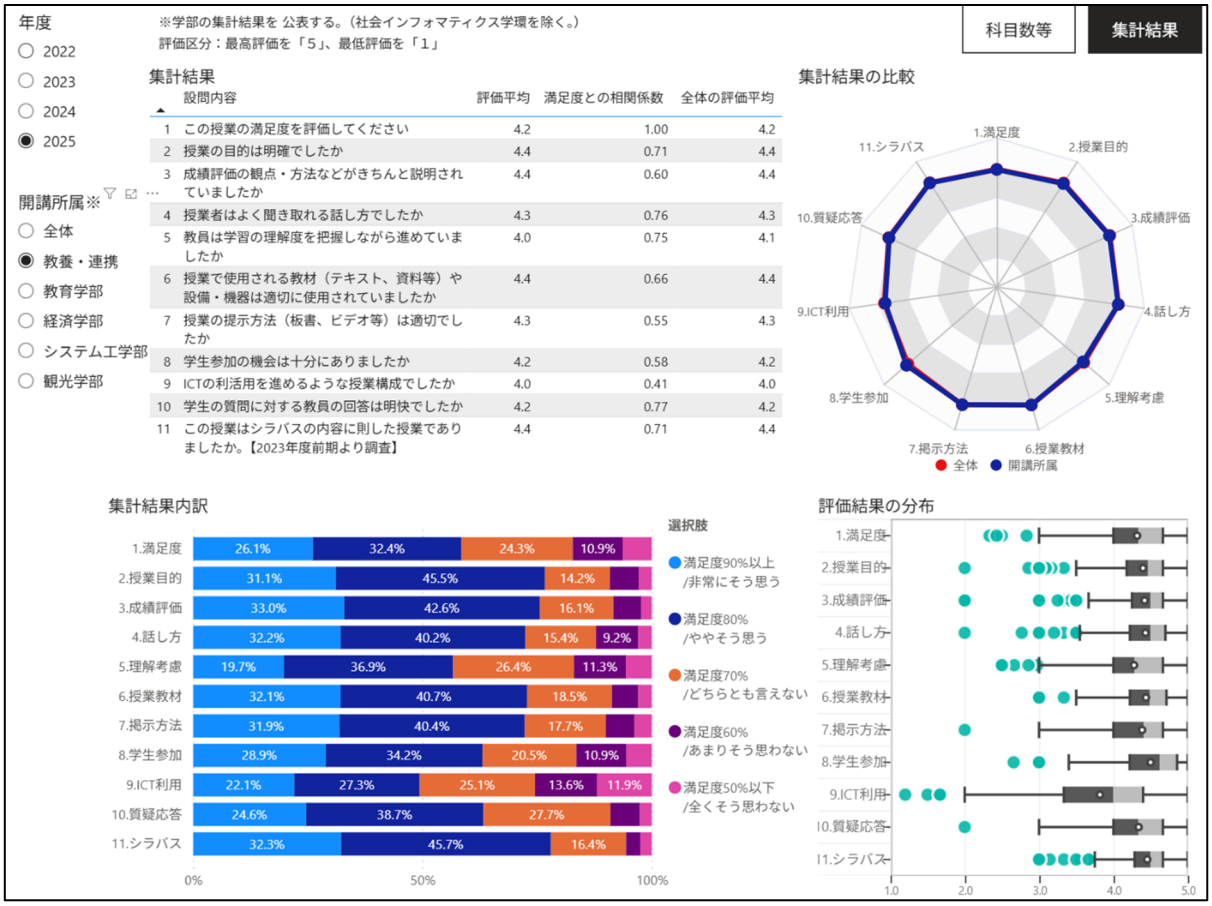
アンケート対象科目数

開講所属	対象科目数	開講所属	対象科目数
教養・連携	176	教育学研究科	15
教育学部	208	経済学研究科	63
経済学部	150	システム工学研究科_博士前期課程	63
システム工学部	124	観光学研究科_博士前期課程	19
観光学部	60	観光学研究科_専門職課程	19
社会インフォマティクス学環	24	全体（大学院）	179
全体（学部及び学環）	742		

延べ回答数 学生所属別

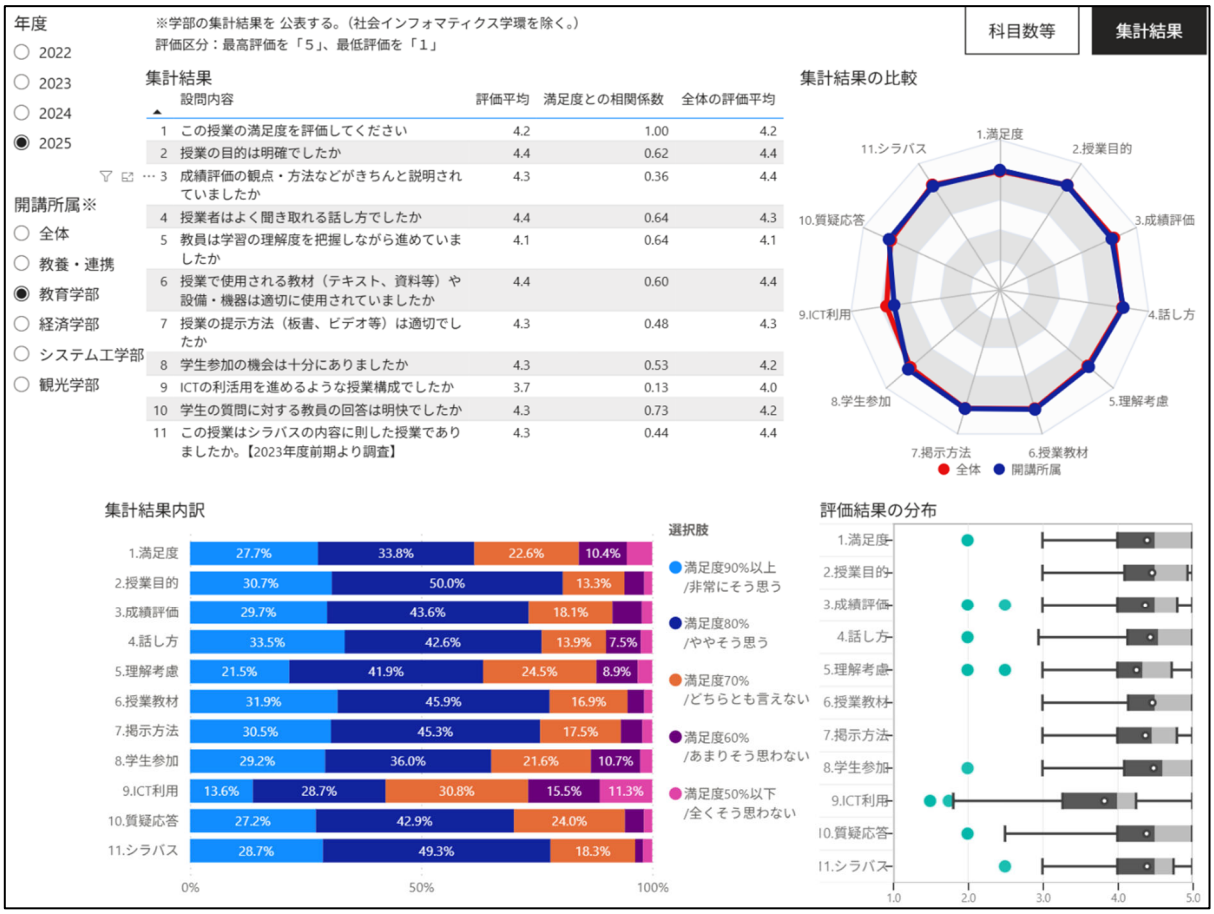
学生所属	延べ回答数	学生所属	延べ回答数
教育学部	2,338	教育学研究科	125
経済学部	1,606	経済学研究科	197
システム工学部	3,396	システム工学研究科_博士前期課程	143
観光学部	840	観光学研究科_博士前期課程	23
社会インフォマティクス学環	267	観光学研究科_専門職課程	51
全体（学部及び学環）	8,447	全体（大学院）	539

・教養教育科目・連携展開科目



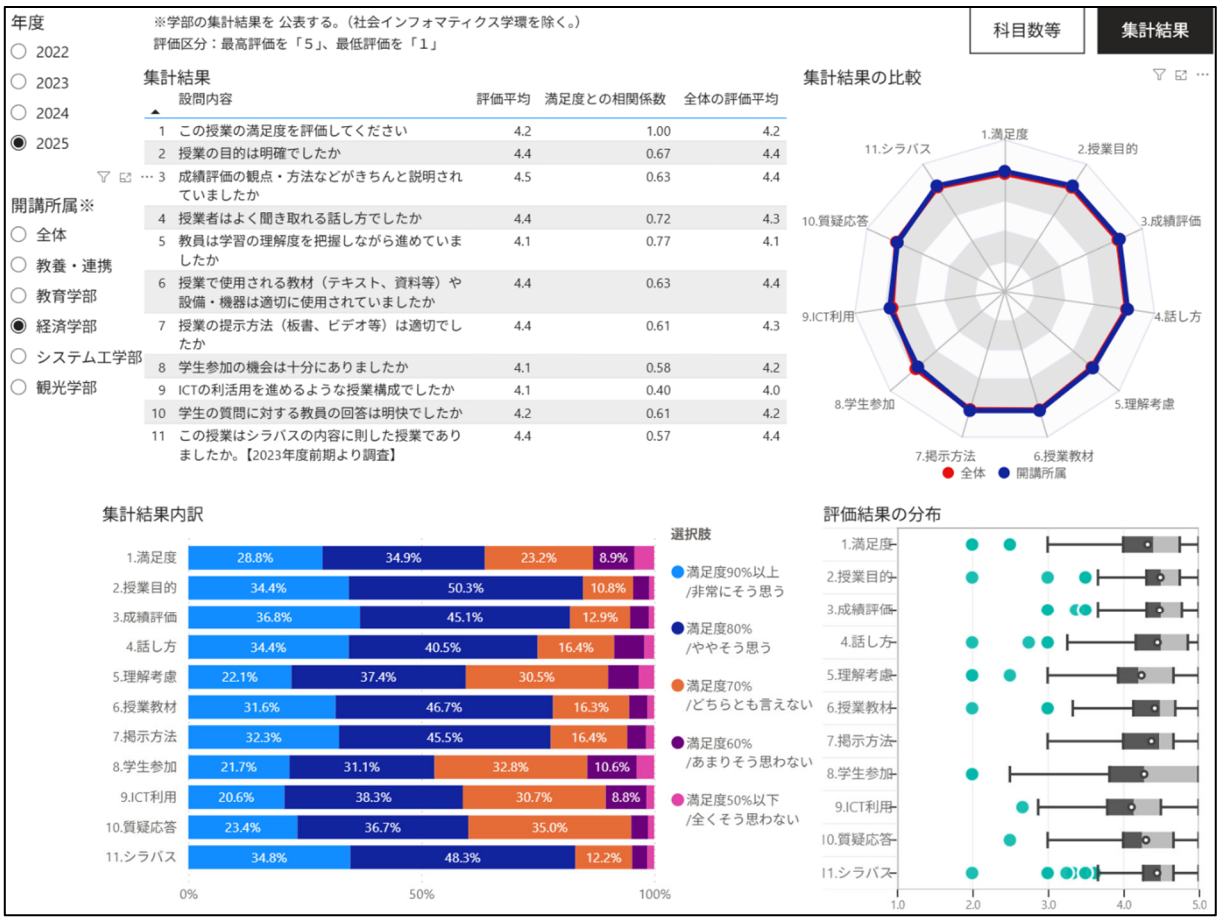
	設問内容	評価平均	満足度との相関係数	全体の評価平均
1	この授業の満足度を評価してください	4.2	1.00	4.2
2	授業の目的は明確でしたか	4.4	0.71	4.4
3	成績評価の観点・方法などがきちんと説明されていましたか	4.4	0.60	4.4
4	授業者はよく聞き取れる話し方でしたか	4.3	0.76	4.3
5	教員は学習の理解度を把握しながら進めていましたか	4.0	0.75	4.1
6	授業で使用される教材（テキスト、資料等）や設備・機器は適切に使用されていましたか	4.4	0.66	4.4
7	授業の提示方法（板書、ビデオ等）は適切でしたか	4.3	0.55	4.3
8	学生参加の機会は十分にありましたか	4.2	0.58	4.2
9	ICTの利活用を進めるような授業構成でしたか	4.0	0.41	4.0
10	学生の質問に対する教員の回答は明快でしたか	4.2	0.77	4.2
11	この授業はシラバスの内容に則した授業でありましたか。【2023年度前期より調査】	4.4	0.71	4.4

・教育学部



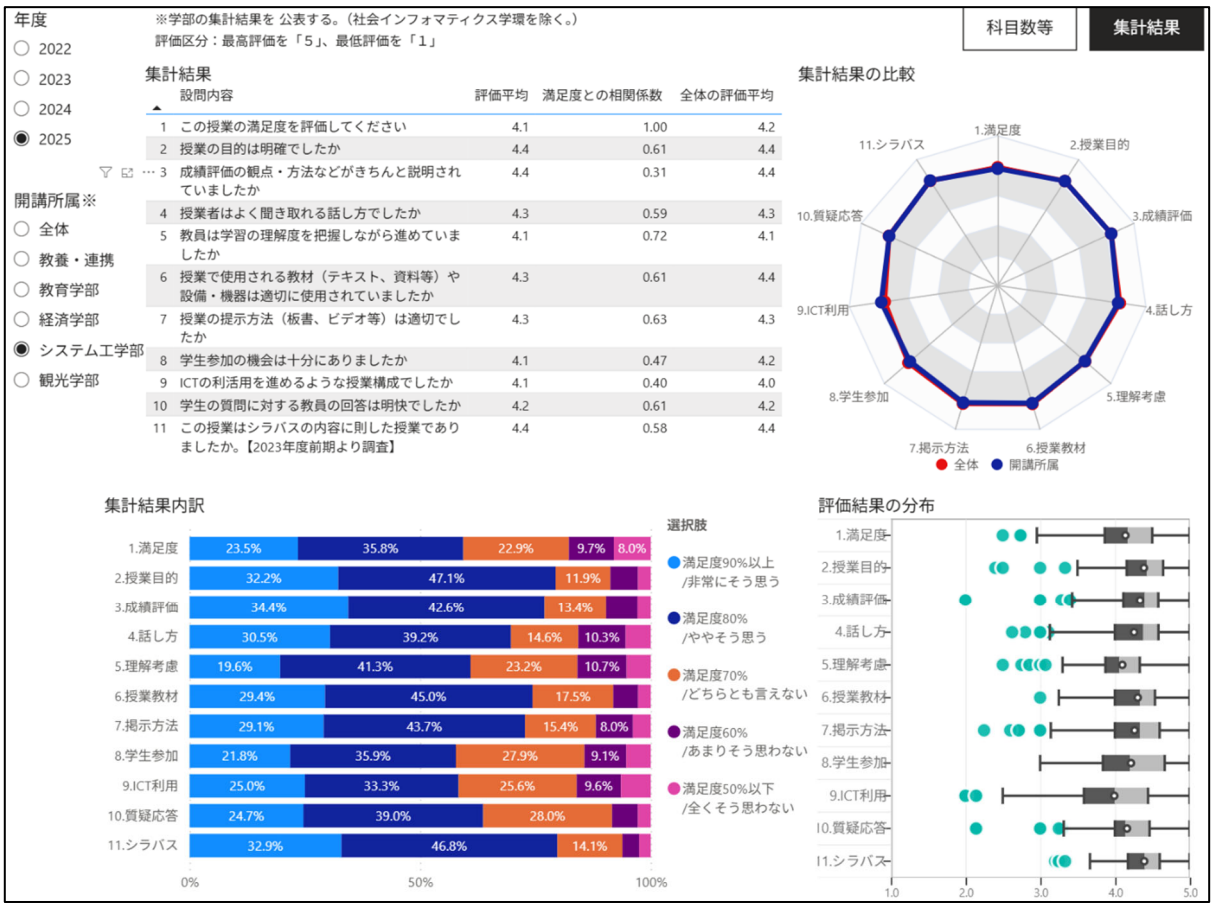
	設問内容	評価平均	満足度との相関係数	全体の評価平均
1	この授業の満足度を評価してください	4.2	1.00	4.2
2	授業の目的は明確でしたか	4.4	0.62	4.4
3	成績評価の観点・方法などがきちんと説明されていましたか	4.3	0.36	4.4
4	授業者はよく聞き取れる話し方でしたか	4.4	0.64	4.3
5	教員は学習の理解度を把握しながら進めていましたか	4.1	0.64	4.1
6	授業で使用される教材（テキスト、資料等）や設備・機器は適切に使用されていましたか	4.4	0.60	4.4
7	授業の提示方法（板書、ビデオ等）は適切でしたか	4.3	0.48	4.3
8	学生参加の機会は十分にありましたか	4.3	0.53	4.2
9	ICTの利活用を進めるような授業構成でしたか	3.7	0.13	4.0
10	学生の質問に対する教員の回答は明快でしたか	4.3	0.73	4.2
11	この授業はシラバスの内容に則した授業でありましたか。【2023年度前期より調査】	4.3	0.44	4.4

・経済学部



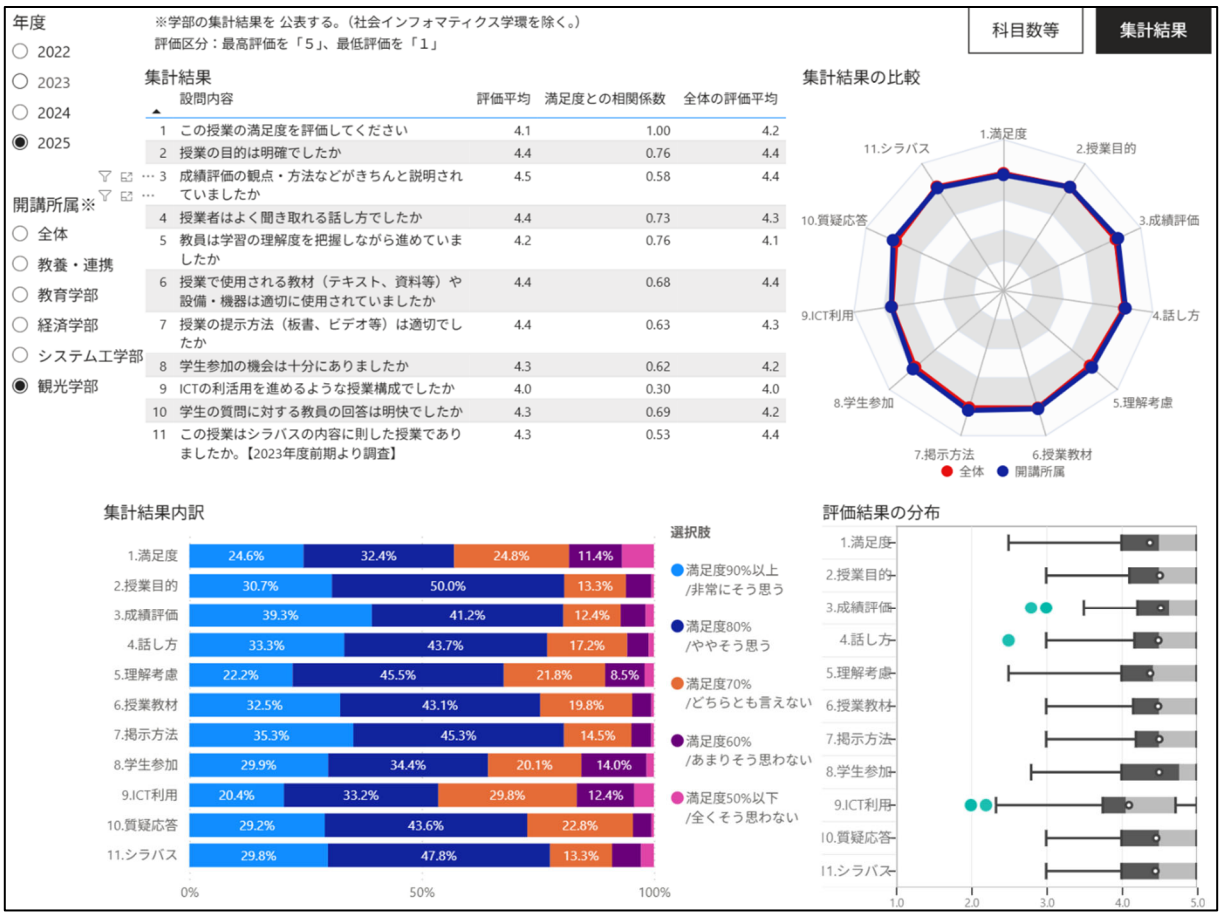
	設問内容	評価平均	満足度との相関係数	全体の評価平均
1	この授業の満足度を評価してください	4.2	1.00	4.2
2	授業の目的は明確でしたか	4.4	0.67	4.4
3	成績評価の観点・方法などがきちんと説明されていましたか	4.5	0.63	4.4
4	授業者はよく聞き取れる話し方でしたか	4.4	0.72	4.3
5	教員は学習の理解度を把握しながら進めていましたか	4.1	0.77	4.1
6	授業で使用される教材（テキスト、資料等）や設備・機器は適切に使用されていましたか	4.4	0.63	4.4
7	授業の提示方法（板書、ビデオ等）は適切でしたか	4.4	0.61	4.3
8	学生参加の機会は十分にありましたか	4.1	0.58	4.2
9	ICTの利活用を進めるような授業構成でしたか	4.1	0.40	4.0
10	学生の質問に対する教員の回答は明快でしたか	4.2	0.61	4.2
11	この授業はシラバスの内容に則した授業でありましたか。【2023年度前期より調査】	4.4	0.57	4.4

・システム工学部



	設問内容	評価平均	満足度との相関係数	全体の評価平均
1	この授業の満足度を評価してください	4.1	1.00	4.2
2	授業の目的は明確でしたか	4.4	0.61	4.4
3	成績評価の観点・方法などがきちんと説明されていましたか	4.4	0.31	4.4
4	授業者はよく聞き取れる話し方でしたか	4.3	0.59	4.3
5	教員は学習の理解度を把握しながら進めていましたか	4.1	0.72	4.1
6	授業で使用される教材（テキスト、資料等）や設備・機器は適切に使用されていましたか	4.3	0.61	4.4
7	授業の提示方法（板書、ビデオ等）は適切でしたか	4.3	0.63	4.3
8	学生参加の機会は十分にありましたか	4.1	0.47	4.2
9	ICTの利活用を進めるような授業構成でしたか	4.1	0.40	4.0
10	学生の質問に対する教員の回答は明快でしたか	4.2	0.61	4.2
11	この授業はシラバスの内容に則した授業でありましたか。【2023年度前期より調査】	4.4	0.58	4.4

・観光学部



※社会インフォマティクス学環については独自開講科目が少ないため、本項目は掲載していません。

【分析状況】

授業評価アンケートについては，まず全体の回答率を向上させることが急務である。回答率の高い授業科目における実施時期や周知方法，授業内での回答の促し方などを共有し，全学的に回答を促進する取組を進める必要がある。

ICT 利活用に関する評価は，例年と同様に授業科目による差が大きい一方，授業満足度との相関は他の評価項目と比べて低い傾向にある。ただし，ICT の活用は，学生の理解を支援し，主体的な学びや授業への参加を促す手段として重要性が高まっている。そのため，単に ICT を導入するだけでなく，授業の目的や内容に応じた効果的な活用方法を検討し，優良事例を全学的に共有・展開することが求められる。

その他の評価項目については，部局ごとに傾向が異なることから，授業満足度との相関や経年変化を確認した上で，各部局の課題に焦点を当てた改善策を検討する必要がある。

＜各学部等からの分析結果＞

学部等	分析コメント
教育学部	到達目標の達成状況の 11 項目のうち、10 項目が大学全体と同じ程度だが、それに達していない項目として、「9. ICT の利活用を進めるような授業構成でしたか」があった。これは毎年度同じ傾向で、今回、以前より特に改善したとはいえない。手を使う創作や実習が多いこと

	も一因と考えられるが、今後より積極的に ICT を活用するよう促したい。
経済学部	経済学部の評価は全設問で全学平均とおおむね同等かやや上回る項目が多く、なかでも「成績評価の観点・方法の説明」(4.5) が全設問中で最も高い。到達目標・成績評価基準をシラバスへ記載し周知してきた取組が、学生の受け止めとして着実に表れているものと考えられる。一方、「学生参加の機会」は評価平均 4.1 と全学平均 (4.2) をわずかに下回っており、これは単年度ではなく近年継続してみられる傾向である。この点については、学部として、講義科目における質問・意見を求める場面の設定、リアクションペーパーや LMS 上の小テスト・掲示板機能を用いた双方向のやり取り、演習・ゼミ系科目でのグループワークやディスカッションの拡充などを通じて、学生が主体的に授業へ参加できる機会を増やす取組を進める。
システム工学部	全ての評価項目において評価は 4 以上あり、講義に関する評価は高いと考えている。評価が比較的低かった「教員は学習の理解度を把握しながら進めていましたか」に関しては、講義中に複数回の小テストを課す科目を増やすなどの工夫が必要である。同様に評価が比較的低かった「学生参加の機会」に関しては、システム工学部における講義は、基本的な知識や技術を体系的に学ぶ講義が多いため、このような結果になったと考えられる。他方、「ICT の利活用」は評価が比較的低いものの、全学の結果と比較すると若干高い評価となっている。本項目は回答のばらつきが大きいことから、科目・授業担当教員ごとの活用状況の違いが反映されている可能性がある。本学部では一部教員が極めて高い ICT 活用技能を有しているため、そのような教員の授業と比較すると、他の授業における活用が不十分と感じられる可能性がある。ICT を上手に活用できている授業の事例を学部内の FD 研修を通じて共有するなどといった対応を今後検討する。
観光学部	授業評価アンケートの結果は概ね全体と同様の傾向を示している。「ICT 利活用」に関しては、昨年度まで、観光学部において特徴的に数値が低かったが、今年度は全体の平均と同じ数値になっている。また、「学生参加」「質疑応答」については全学平均値より高い結果がみられ、アクティブラーニングの推進や、観光学部の特徴でもあるフィールドワークや体験型活動の効果がうかがえる。

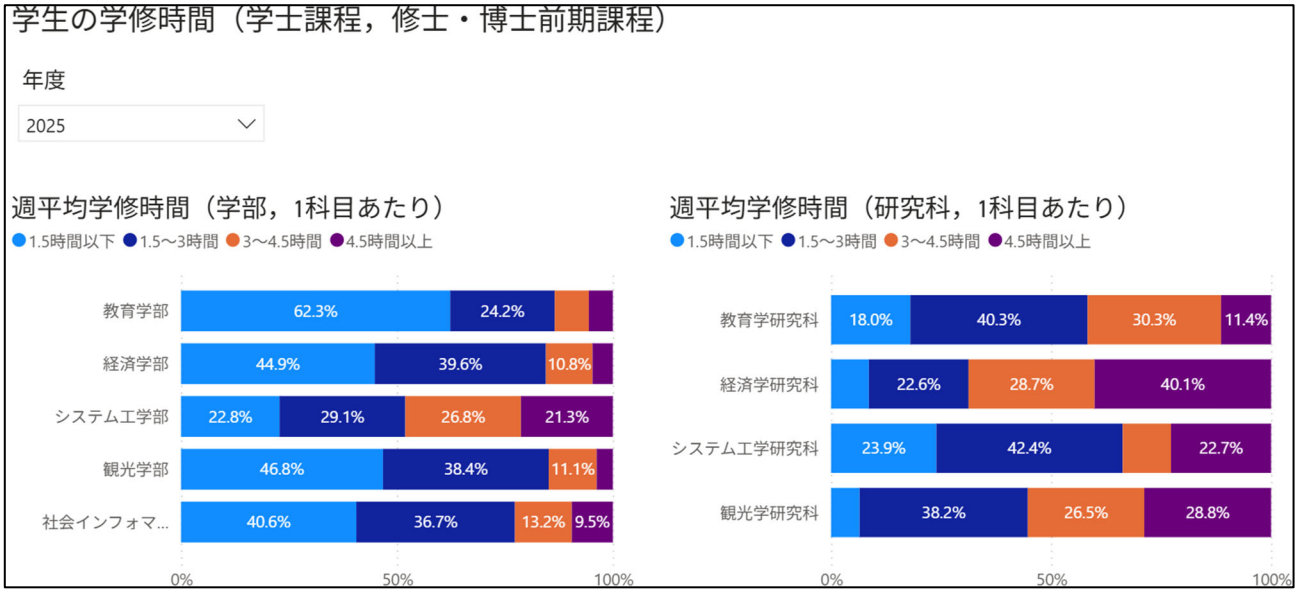
３－３　学修時間

学生が、学位プログラムが期待する水準の資質・能力を身に付けるための一般的な前提条件を満たしているかを明らかにするため、学生が授業内及び授業外で取り組む学修の平均時間を以下に示します。

▸ **学修に費やした時間の平均値及び分布について**

・各学期に実施されている授業評価アンケートより

「この授業に関する通常授業期間の学修時間（授業時間を除く、１週間あたりの平均）」について



・令和７年度前期・後期授業評価アンケート「授業に関する通常授業期間の学修時間について」より集計

【分析状況】

授業時間外の学修時間については，各部局における回答割合の傾向は，概ね例年と同様である．一方，前年度と比較すると，すべての部局において，授業時間外の学修時間を「1.5 時間以下」と回答した学生の割合が減少している．また，それに伴い，「3～4.5 時間」「4.5 時間以上」と回答した学生の割合が増加している部局も多くみられる．このことから，授業時間外の学修時間が極端に短い学生の割合は全学的に減少傾向にあると考えられ，これまで進めてきた課題の提示，予習・復習の促進，学修支援環境の整備など，1 単位当たりの学修時間の実質化に向けた取組が，それぞれの部局で一定の成果を上げている可能性がある．

今後は，この傾向を継続的に確認するとともに，LMS の利用頻度や教材閲覧，課題提出などの状況を分析し，授業時間外学修を促進する上で効果的な活用方法を検討する必要がある．

＜各学部等からの分析結果＞

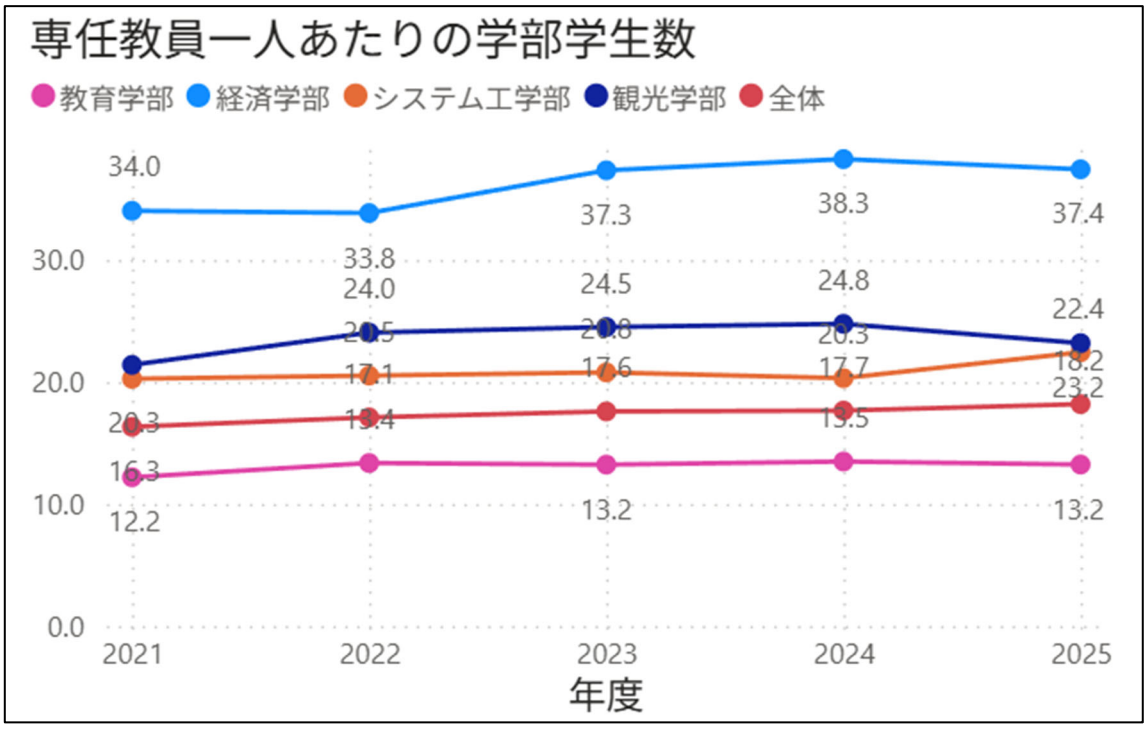
学部等	分析コメント
教育学部	他学部等に比べ学修時間がやや少ないという結果になっている。前年度と比べると、若干の改善はみられている。特定の科目に紐づいた活動ではないが、教育学部生の学びとして学校ボランティアやミュージアム・ボランティアに積極的に出向く者も多く、社会の現場で学生が自主的学修に取り組んでいる。とはいえ、授業時間外の学修について十分でないのではないかという問題について教員全体の会議で共有し、時間外学修向上の傾向維持に努める。

経済学部	1科目あたりの週平均学修時間は、昨年度と比べて「1.5時間以下」と回答した層が減少し、その分が「1.5〜3時間」の層へ移っており、分布全体が短時間側から中位側へと底上げされつつある点が特徴である。週3時間以上の基準を満たす割合もわずかに増加した。もっとも、依然として8割超が週3時間未満にとどまっており、基準到達層の拡大は引き続きの課題である。シラバスにおける想定学修時間の明示や、予復習を前提とした課題提示など、授業設計の面から授業外学修の定着を図っていきたい。
システム工学部	1科目あたりの週平均学修時間は、他学部と比較して長い傾向が見られる。特に、3〜4.5時間と4.5時間以上を合わせると48.1%となっており，半数近くの学生が3時間以上の学修時間を確保できている。ガイダンス等で時間外学修を増やすように学生に対して周知した効果が出ている可能性がある。ただ、依然として、3時間以下の学生が半数以上いることから、今後も、学生に対して周知を続けていく。
観光学部	1科目あたり週平均学修時間について、1.5時間以下の学生の割合が前年度の50.6%から46.8%へと減少し、1.5〜3時間の割合が32.5%から38.4%に増加するなど、若干の改善が見られた。ガイダンス等において、引き続き学修時間の確保のための指導に努めたい。
社会インフォマティクス学環	一期生が3年生へ進み、専門科目の履修が増える中、適切な自学自習の充実が求められる。約7割は「3時間以下」と回答している。配属したゼミの所属による違いは現時点では分析できていない。今後累積したデータに基づき分析することを検討している。今後も、学生が自身の学修目標を見定め、主体的に適切な学修時間を確保できるよう、履修指導や個別相談等を通じて、指導・支援に努める。
教育学研究科	他研究科等より学修時間が少なめの結果となっている。一方、3時間に満たないものとなる回答は年度を追うごとに75.4%、67.6%、58.3%と減っており、全体として改善がみられる。
経済学研究科	1科目あたりの週平均学修時間は、週3時間以上と回答した割合が昨年度から大きく増加し、なかでも最も長い「4.5時間以上」の層が全区分中で最大を占めている。短時間側に分布が偏る学部段階とは対照的に、研究科では深い学修がさらに定着しつつあるといえ、大学院教育として期待される学修量が確保されている。この水準を維持できるよう、各プログラムの指導を引き続き支えていきたい。

システム工学研究科	1科目あたりの週平均学修時間が3時間以上の割合が33%と低くなっており、システム工学部のそれと比べると顕著に低い。例えば「システム工学講究」は、学生それぞれが自身の研究に関する発表をすることを通してプレゼンテーション技能等を学ぶ授業であるため、当該授業の時間外学修に相当する活動と日常の研究活動との切り分けが難しく、結果的に当該授業の時間外学修とみなされるべき時間がアンケートに反映されていない可能性もある。いずれにせよ、単位修得のためには定められた学修時間を確保する必要があるため、研究以外の授業科目に関しても十分な時間外学修を増やすように、ガイダンス等で学生に対して周知していく。
観光学研究科	1科目当たり週平均学習時間は、1．5～3時間が前年度53.8%から今年度38.2%と減少し、3～4.5時間が前年度20.0%から今年度26.5%、4．5時間以上が15.4%から28.8%と改善が見られ、カリキュラム改革の効果がうかがえる結果となった。

３－４　教員一人あたりの学生数

学生数に対して十分な教員を確保することで、密度の濃い授業や丁寧な履修指導が可能な環境であることを明らかにするため、学生数に対して十分な教員を確保していることを以下に示します。



※各年５月１日時点。学年進行中の「社会インフォマティクス学環」は非公表とする。

４．卒業時･卒業後の情報

４－１　学位の取得状況

学生が、個々の授業科目の履修の結果として、「卒業認定・学位授与の方針」に定める資質・能力を備えていることを明らかにするため、学生が取得した学位に関する情報を以下に示します。

▸ **学位の名称と授与者の数について**

・年度ごとの学位取得者数（各年 3 月 31 日時点）

＜学部＞

設置区分：学部・学環

学位	2021	2022	2023	2024	2025
学士（教育学）	164	167	164	164	165
学士（経済学）	324	319	307	302	317
学士（工学）	327	312	296	318	292
学士（観光学）	128	105	135	129	125
合計	**943**	**903**	**902**	**913**	**899**

＜修士・博士前期課程＞

設置区分：修士・博士前期課程

学位	2021	2022	2023	2024	2025
教職修士（専門職）	24	18	19	22	21
修士（経済学）	36	38	36	30	34
修士（工学）	120	136	130	145	137
修士（観光学）	10	11	11	6	12
観光地域マネジメント修士（専門職）				10	7
合計	**190**	**203**	**196**	**213**	**211**

＜博士後期課程＞

設置区分：博士後期課程

学位	2021	2022	2023	2024	2025
博士（工学）	5	2	1	2	2
博士（観光学）	6	2	1	2	4
合計	**11**	**4**	**2**	**4**	**6**

【分析状況】

学部の学位取得状況については、概ね入学者の数と同等の卒業者が出ており、良好と考えられる。観光学部の 2022 年度卒が少ないのは、コロナ禍の影響をもっとも大きく受けた学年の学生であり、例えば、海外留学等の機会を逃した学生が意識的に卒業を延期している事例もあることから、これらが影響していると推測される。2023 年度と 2025 年度のシステム工学部の卒業生が、やや少ない。2023 年度は定員 305 名であるため、卒業率では 97%となるため問題ないが、2025 年度の卒業生数の低下（292 名）は留年生の増加と結びついているため、注意が必要である。特に 2026 年度からシステム工学部は新課程に移行しており、留年生に対して履修指導を丁寧に行うなど、サポートが必要である。

研究科の学位取得状況についても年度ごとの修了生数に多少の違いがあるが、入学者数との関係では概ね良好と考えられる。2024 年度のシステム工学研究科の修了生が増加している理由は 2023 年度の卒業予定であった学生が卒業したためである。また観光学研究科では 2024 年度より観光地域マネジメントの修了生（定員 10 名）を送りだしており、2025 年度の修了生が 7 名となっているため今後の動向を注視していきたい。

経済状況や新卒採用の動向を勘案しつつ学生へのキャリア支援のあり方を検討すると同時に、過年度生への指導・支援体制についても各学部・研究科への点検を依頼していく。

＜各学部等からの分析結果＞

学部等	分析コメント
教育学部	入学定員に鑑み年度ごとの僅かな増減はあるものの妥当な数字であると考えられる。学士（教育学）の授与者数は 2021 年度から 2025 年度までほぼ一定であり、それは該当の入学年度の定員である 165 名とほぼ一致している。
経済学部	経済学(学士)の学位授与者数は、2021 年度から 2025 年度にかけて 324 名、319 名、307 名、302 名、317 名で推移している。2021 年度以降は緩やかな減少が続いていたが、2024 年度の 302 名を直近の底として、2025 年度は 317 名へと 15 名増加した。直近 5 年間（2021～2025 年度)の授与総数は 1,569 名で、前年度報告(2020～2024 年度の 1,577 名)とほぼ同水準にあり、学位授与の規模は安定的に維持されている。経済学は学士の 4 分野のなかで最大規模の分野であり、2025 年度は最も多い 317 名（学士全体 899 名の約 35%)を占め、学部の学位輩出の中核を担っている。
システム工学部	割合で見ると、入学者に対する卒業生の割合は、90～97%で推移しており、学士の育成が一定のレベルで継続して行われていると考えられる。ただし、2025 年度は学位取得者数が少なくなっている。この学年は 10 メジャー制最後の学年に相当することから、当該課程の学生で卒業延期となってしまった留年生が少なくないことを示唆している。心身の不調や学習意欲喪失といった問題を抱えて留年を繰り返している学生もいるため、そのような学生に対するフォローが必要であると考えている。また、新課程への移行によるカリキュラム変更により留年生の卒業が困難になってしまうことがないよう、履修指導を丁寧に行うなど、留年生に対するフォローが必要と考えている。
観光学部	従来から学位取得者数は年度ごとに増減があり、主な要因として、海外留学や長期インターンシップ、ワーキングホリデー等を理由に休学する学生の存在があげられる。特に 2022・2023 年度はコロナ禍の影響から変動が大きかったが、2025 年度には変動も落ち着いてきている。
教育学研究科	入学定員に鑑み年度ごとの僅かな増減はあるものの妥当な数字であると考えられる。教職修士（専門職）の授与者数は、大きな変動はないとはいえ、2021 年度から 2025 年度の間で変動がある。これは大学院への入学者数の変動に対応している。

経済学研究科	経済学（修士)の学位授与者数は、2021 年度から 2025 年度にかけて 36 名、38 名、36 名、30 名、34 名で推移している。2024 年度に 30 名まで減少したが、2025 年度は 34 名となった。直近 5 年間の授与総数は 174 名で、前年度報告（175 名)とほぼ同水準を保っている。母数が小さく年度ごとの変動はやや大きいものの、2025 年度の修士全体（211 名)のなかでは工学(137 名)に次ぐ規模を占めており、研究科における学位輩出を安定的に行っているといえる。
システム工学研究科	前期：5 年間の学位取得数の変動が小さく、入学者に対して 90%前後となっており、研究者育成が一定のレベルで継続して行われていると考えられる。一方で、毎年、数%程度が留年し、学位を取得できない学生がいる。そのようなケースは、学生自身に問題があることも一因として考えられ、キャンパスライフ・健康支援センターと協力して対応している。 後期：5 年間の学位取得数の変動が大きく、研究者育成の取り組みにおいて、さらなる安定性や向上を目指す必要がある。社会人学生に対しては、勤務先の事情等により柔軟な対応が必要である。
観光学研究科	修士及び専門職修士の学位取得状況は、休学や長期履修の学生が存在することと当研究科の定員状況から見て、良好な状況を維持していると考えられる。博士の学位取得事情については、早期の取得のための研究科内の認識の共有やカリキュラムの充実を進めており、2022~24 年には 1～2 名だったのに対し 2025 年度には 4 名の取得と、改善がみられる。

４－２　学生の成長実感・満足度

学生が、「卒業認定・学位授与の方針」に定められたそれぞれの資質・能力をどの程度身に付けられているか等に関する学生の主観的な評価を明らかにするため、また、「卒業認定・学位授与の方針」に定められた資質・能力の育成に関してどのような評価を受けているのかを明らかにするため、卒業・修了者を対象にアンケートを実施しています。令和４年度からは全学統一のアンケート項目とし、「卒業認定・学位授与の方針」に対しての認知度・達成度・感想等についてアンケートを実施しています。令和７年度卒業・修了者へのアンケート調査結果の概要は以下のとおりです。

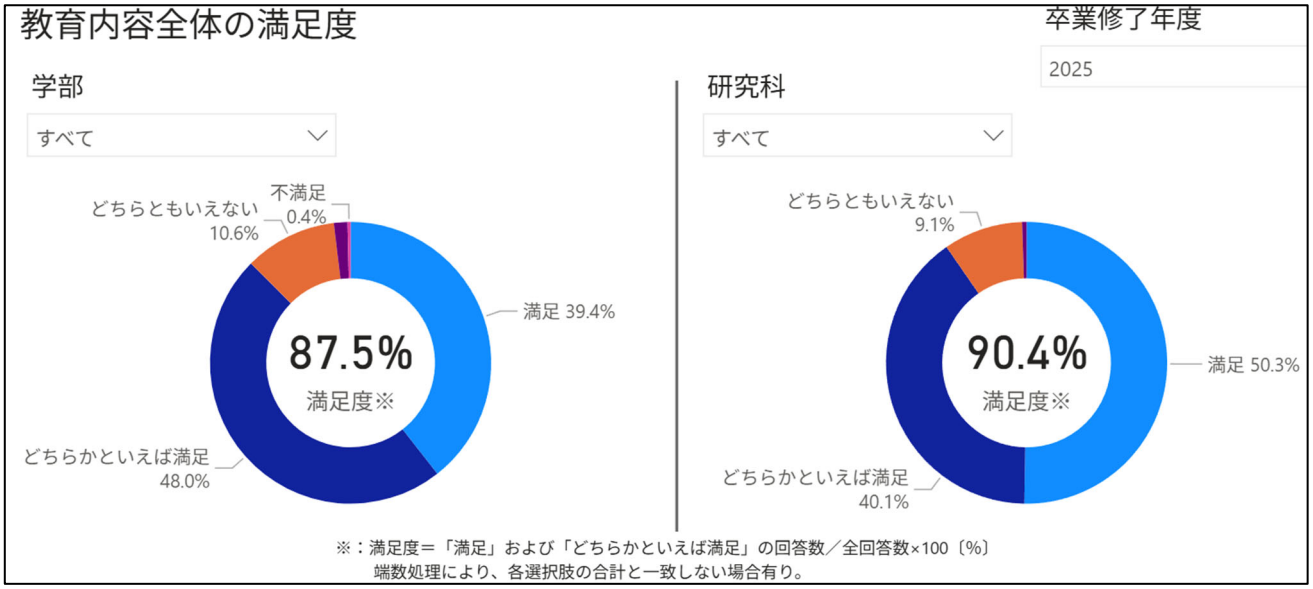
＜令和７年度卒業・修了時アンケート＞
実施期間：令和８年１月～２月下旬
実施方法：和歌山大学 Moodle のアンケート機能にて実施
回答率　：全体９３．６％（卒業・修了者１，１０７名中１，０３６名回答）

教育学部	９６．４％
経済学部	９７．１％
システム工学部	９０．３％
観光学部	８９．３％

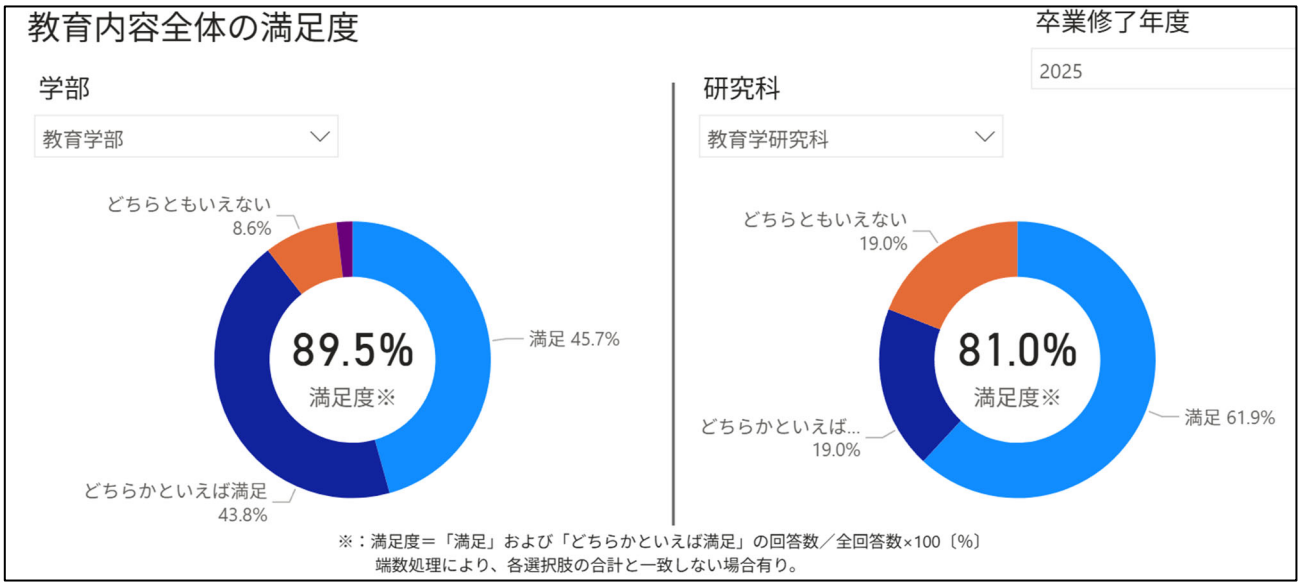
教育学研究科（教職開発専攻）	９１．３％
経済学研究科	１００％
システム工学研究科（博士前期課程）	９１．２％
観光学研究科（博士前期課程）	１００％
観光学研究科（専門職学位課程）	８７．５％
システム工学研究科（博士後期課程）	１００％
観光学研究科（博士後期課程）	１００％

▸ **和歌山大学での教育内容全体の満足度について**

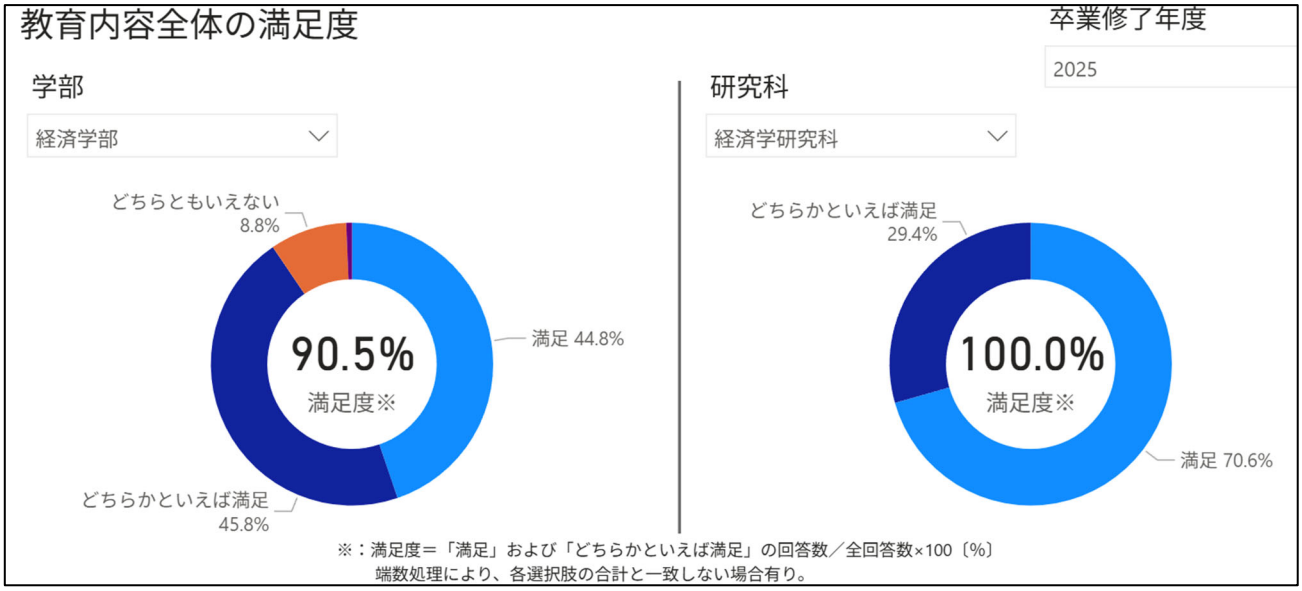
※：満足度＝「満足」および「どちらかといえば満足」の回答数／全回答数×100〔%〕
端数処理により、各選択肢の合計と一致しない場合有り。



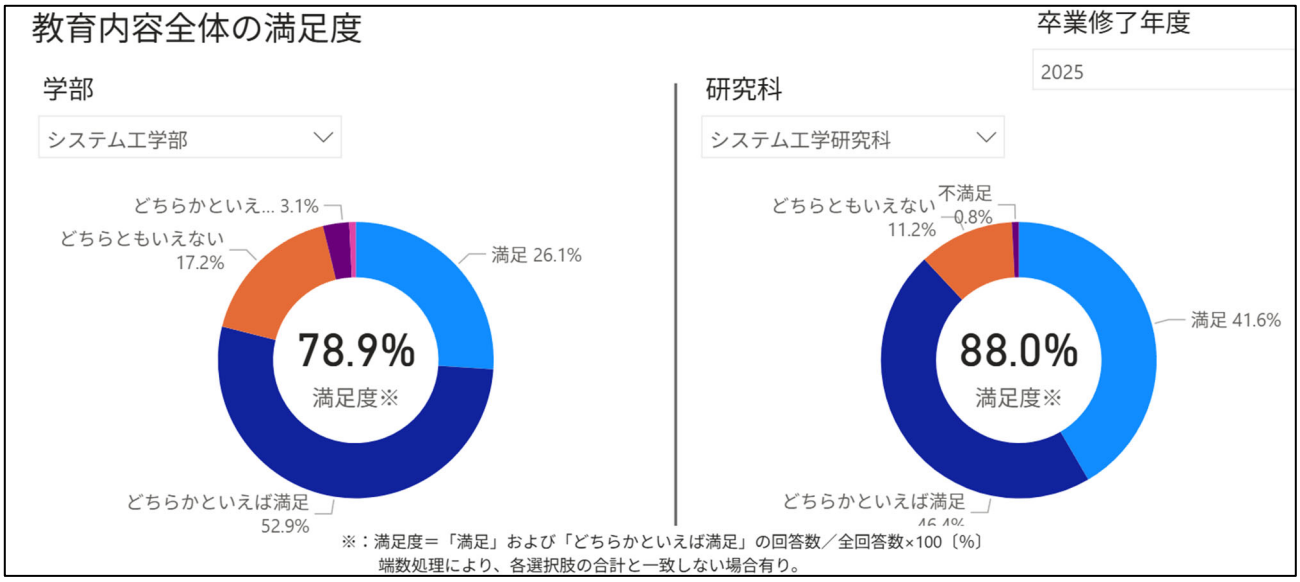
＜教育学部・教育学研究科＞



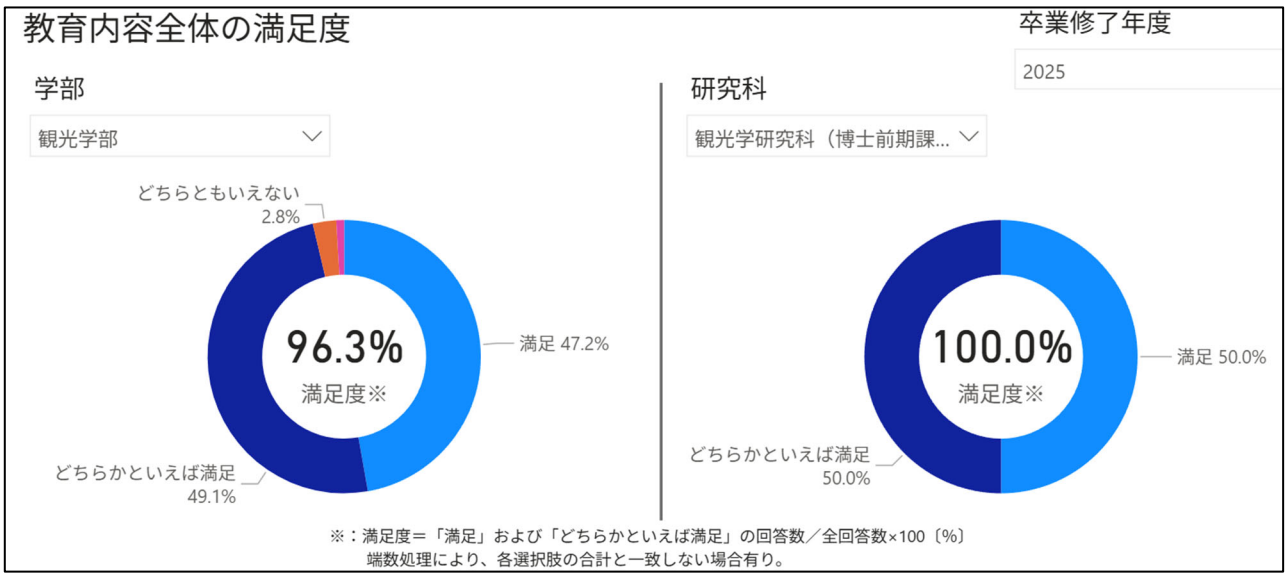
＜経済学部・経済学研究科＞

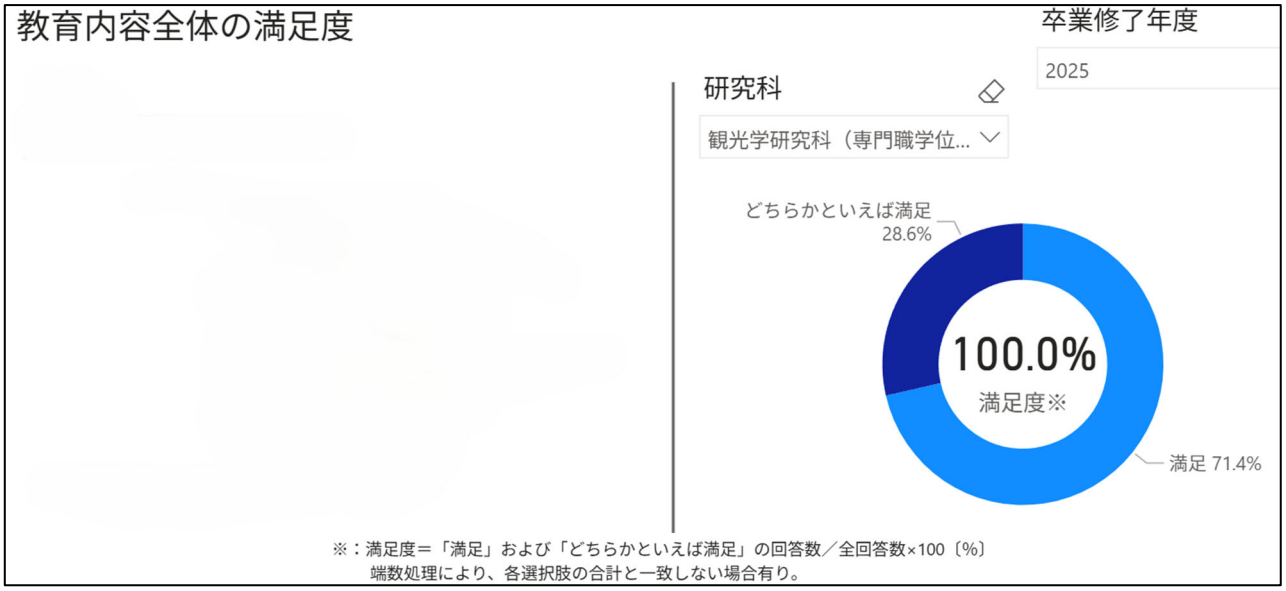


＜システム工学部・システム工学研究科＞



＜観光学部・観光学研究科＞





【分析状況】

和歌山大学での教育内容全体に対する満足度は、この数年間継続して上昇している。学部では、78.7%（2023 年度）から 82.1%（2024 年度）、87.5%（2025 年度）、研究科では 80.7%（2023 年度）から 84.5%（2024 年度）、90.4%（2025 年度）へと上昇しており、2025 年度は 9 割近くの卒業生・修了生が教育内容について「満足」または「どちらかといえば満足」と回答している。特に経済学部と観光学部、システム工学研究科は 10%前後、満足度を向上させている。2025 年度の卒業生は、コロナ禍の影響が少なくなってきた 2022 年度の入学であることも理由の一つと考えられるものの、和歌山大学において提供している教育内容については、概ね良好と言えるであろう。

他方で、昨年度と比較し、教育学研究科では昨年度に続き満足度がわずかであるが低下している。「満足」と回答した割合は、31.6%（2023 年度）から 45.5%（2024 年度）、61.9%（2025 年度）と増えているのに対して、「どちらともいえない」についても 5.3%（2023 年度）から 9.1%（2024 年度）、19%（2025 年度）と増加しており、その理由の分析と対応が望まれる。

大学全体の課題としては、アンケートの回収率がわずかであるが低下している点があげられる（97.7 %から 93.6 %へ）。学生へのアンケートの周知を徹底することが望まれる。

＜各学部等からの分析結果＞

学部等	分析コメント
教育学部	満足度は前年度の 87.0 %から 89.5 %へと伸びた。教員免許状取得が卒業要件となっているため、学生が学びに向かう意識は高く、また卒業（教員免許状取得）までのプロセスが充実している結果と考えている。引き続き、教育活動における学生の満足度をさらに高められるよう授業内容やゼミ活動の充実をはかる。

経済学部	2025 年度卒業生の教育内容全体に対する満足度（「満足」＋「どちらかといえば満足」）は 90.5%となり、初めて 9 割台に達した。81.3%であった前年度から約 9 ポイントの上昇で、改善幅は大きい。内訳をみると、「満足」が 44.8%、「どちらかといえば満足」が 45.8%とほぼ拮抗しており、肯定的評価のおよそ半数が積極的な「満足」で占められている。「どちらともいえない」は 8.8%、明確な不満はごくわずかにとどまり、卒業時点での教育内容への評価は着実に高まっているといえる。ただし、単年度での大幅な上昇であるため、この水準が定着するかどうかは次年度以降の推移を確認する必要がある。
システム工学部	一定の満足度は得られているものの、満足度が昨年度から若干低下している（80.5%→78.9%）。学生の満足度をさらに高められるよう、授業内容やゼミ活動の充実をはかる必要があると考えている。なお、本アンケートの対象となった学年は 10 メジャー制最後の学年に相当することから、新課程への移行に伴って学生の満足度がどのように変化するか、次年度以降の結果を注視する。
観光学部	教育内容への満足度は前年度の81.6%から96.3%と上昇し、引き続き中期目標の80%を上回る水準を維持している。観光学部の学生は地域や海外での学外活動への積極的な参加を希望する学生も多いことから、そうしたニーズに対応した学修プログラムを維持できるよう努めていく。
教育学研究科	満足度は前年度の 86.4 %から 81.0 %に減少したが、うち、満足という回答は前年度の 45.5 %から 61.9 %に上昇し、昨年度はあった不満足という回答がなくなった。修了と同時に教員免許状（専修免許状）が取得できるカリキュラムとなっているため、院生が学びに向かう意識は高いことからの結果と考えている。
経済学研究科	2025 年度修了生の満足度は 100.0%となり、回答した修了生の全員が肯定的な評価を示した。前年度の 96.7%からさらに上昇し、「どちらともいえない」や否定的な回答は見られない。とりわけ「満足」が 70.6%と回答の 7 割を超え、「どちらかといえば満足」(29.4%)を大きく上回っている。大学院教育の内容は修了生から高く評価されているといえる。なお、研究科は修了者・回答者の数が少なく数値が変動しやすいため、100%という結果については、引き続き高い水準を維持できているかという観点から経年的に確認していく。
システム工学研究科	満足度が昨年度から改善しており（81.7%→88.0%）一定の満足度は得られていると考えられる。今後も、学生の満足度をさらに高められるよう、授業内容やゼミ活動の充実をはかる。なお、2027 年度からクラスタ再編を予定しているため、今後、その効果を注視する。
観光学研究科	博士前期課程の満足度は前年度と同じく 100%に達している。専門職学位課程においても、社会人学生が過半を占めることから評価が厳しめになる傾向はあるものの、満足度は 100%となり前年度の 75%から上昇した。引き続きプログラム内容の充実を図っていく。

４－３　学位プログラムを通じた資質・能力等の修得状況

令和７年度卒業・修了生を対象としたアンケートで、学生が学位プログラムを通じて修得した資質・能力について質問を行いました。（調査の概要は項目４－２を参照）アンケート結果は以下のとおりです。

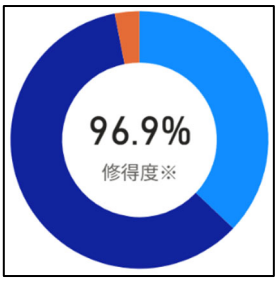
※：修得度＝「身についた」および「ある程度身についた」の回答数／全回答数×100〔%〕
端数処理により、各選択肢の合計と一致しない場合有り。

●身についた　●ある程度身についた　●あまり身につかなかった　●身につかなかった

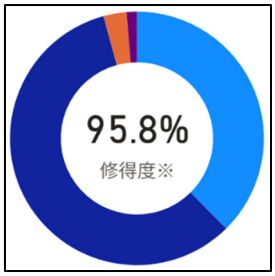
（学士課程）

①幅広い教養や倫理性

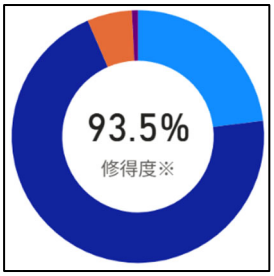
＜教育学部＞



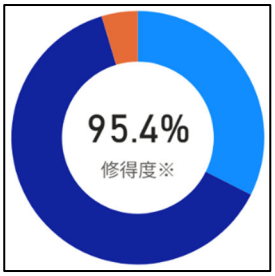
＜経済学部＞



＜システム工学部＞

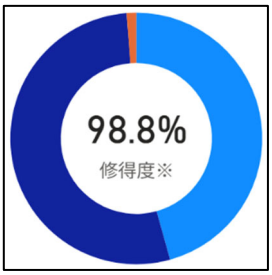


＜観光学部＞

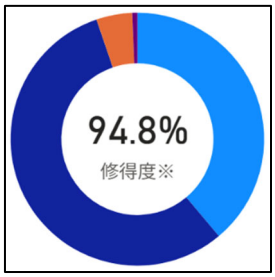


②知識や学力

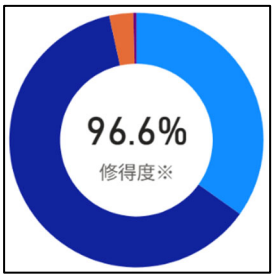
＜教育学部＞



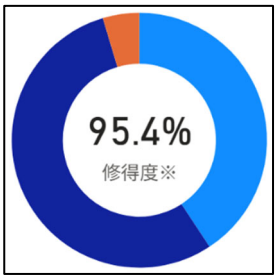
＜経済学部＞



＜システム工学部＞

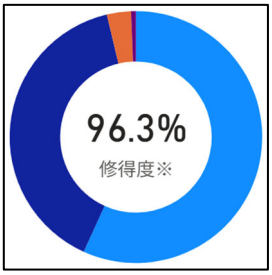


＜観光学部＞

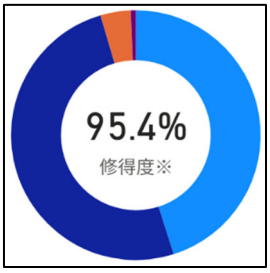


③主体性

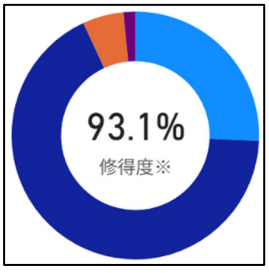
＜教育学部＞



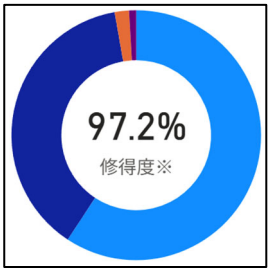
＜経済学部＞



＜システム工学部＞



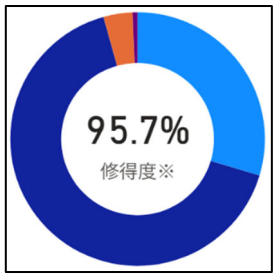
＜観光学部＞



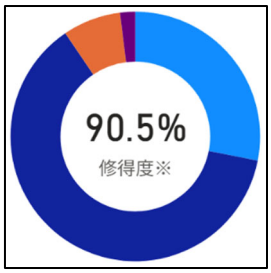
●身についた ●ある程度身についた ●あまり身につかなかった ●身につかなかった

④創造力

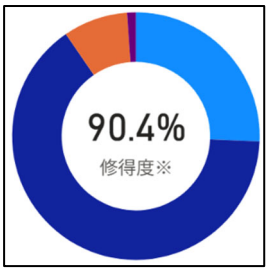
＜教育学部＞



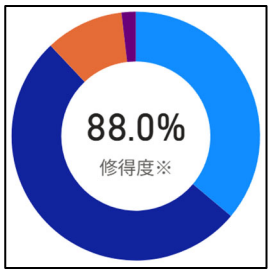
＜経済学部＞



＜システム工学部＞

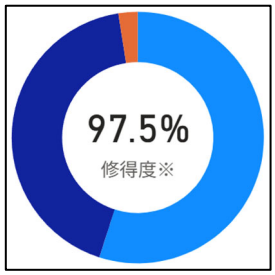


＜観光学部＞

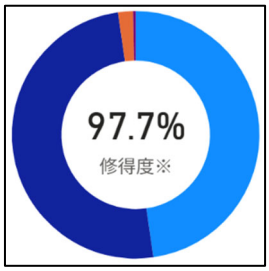


⑤実践力

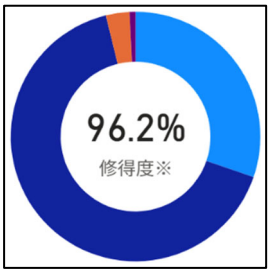
＜教育学部＞



＜経済学部＞



＜システム工学部＞

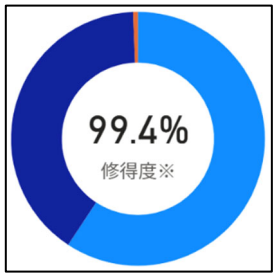


＜観光学部＞

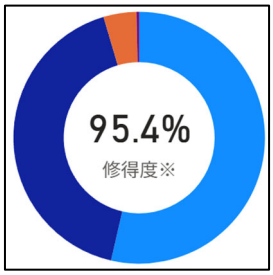


⑥コミュニケーション力

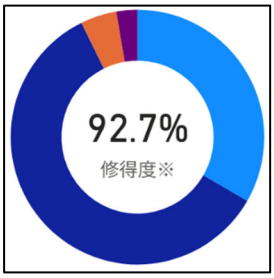
＜教育学部＞



＜経済学部＞



＜システム工学部＞

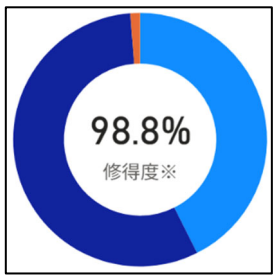


＜観光学部＞

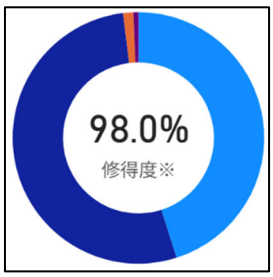


⑦多角的な思考力

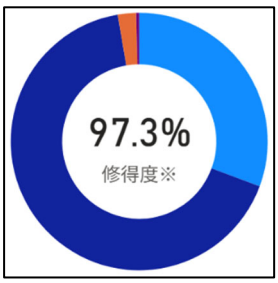
＜教育学部＞



＜経済学部＞



＜システム工学部＞

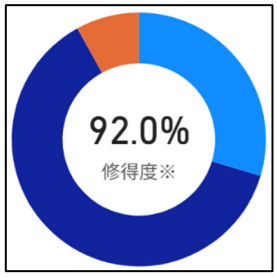


＜観光学部＞

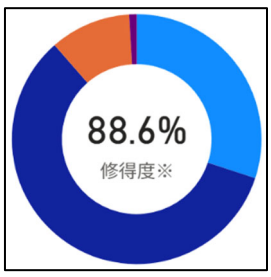


⑧ICT 機器の活用能力や情報リテラシー

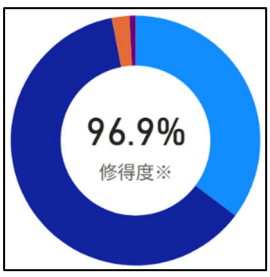
＜教育学部＞



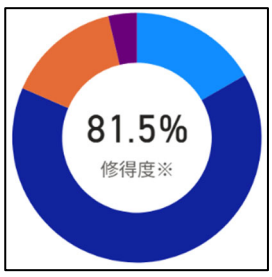
＜経済学部＞



＜システム工学部＞



＜観光学部＞



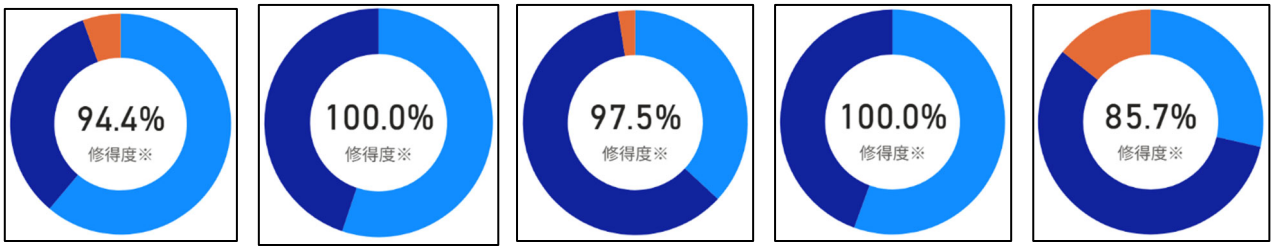
●身についた ●ある程度身についた ●あまり身につかなかった ●身につかなかった

（修士・博士課程）

①高度な専門知識を獲得し、それを深める力

＜教育学研究科＞　＜経済学研究科＞　＜システム工学研究科＞＜観光学研究科＞

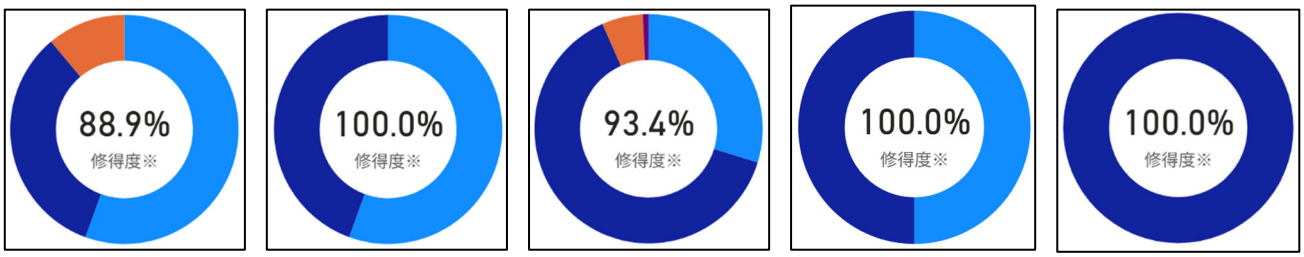
（博士前期課程）　（専門職学位課程）



②高い人権意識や倫理観

＜教育学研究科＞　＜経済学研究科＞　＜システム工学研究科＞＜観光学研究科＞

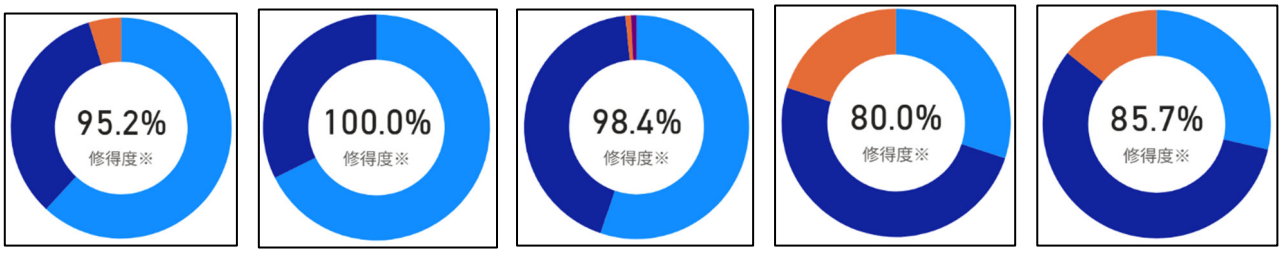
（博士前期課程）　（専門職学位課程）



③課題解決能力

＜教育学研究科＞　＜経済学研究科＞　＜システム工学研究科＞＜観光学研究科＞

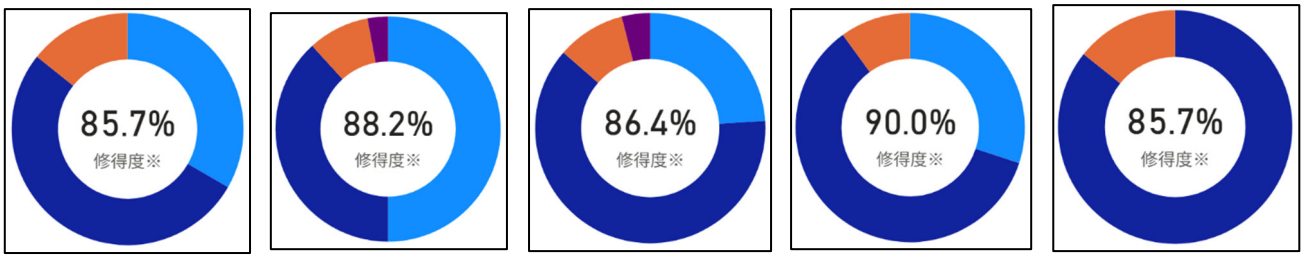
（博士前期課程）　（専門職学位課程）



④リーダーシップを発揮する力

＜教育学研究科＞　＜経済学研究科＞　＜システム工学研究科＞＜観光学研究科＞

（博士前期課程）　（専門職学位課程）

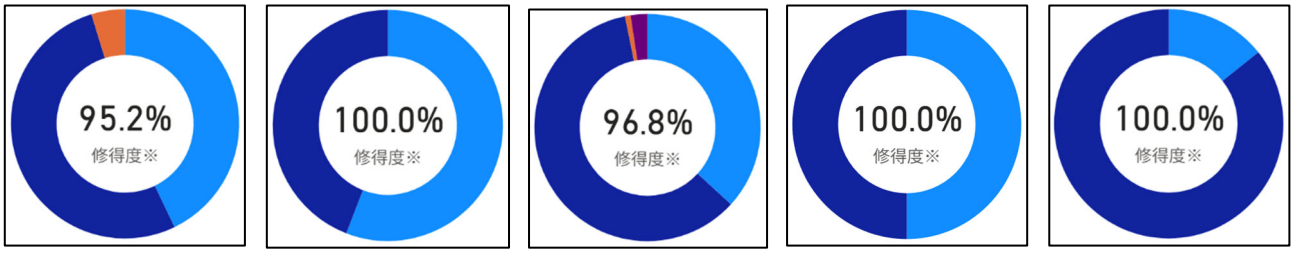


●身についた ●ある程度身についた ●あまり身につかなかった ●身につかなかった

⑤平易かつ論理的に表現し、発信する力

＜教育学研究科＞　＜経済学研究科＞ ＜システム工学研究科＞＜観光学研究科＞

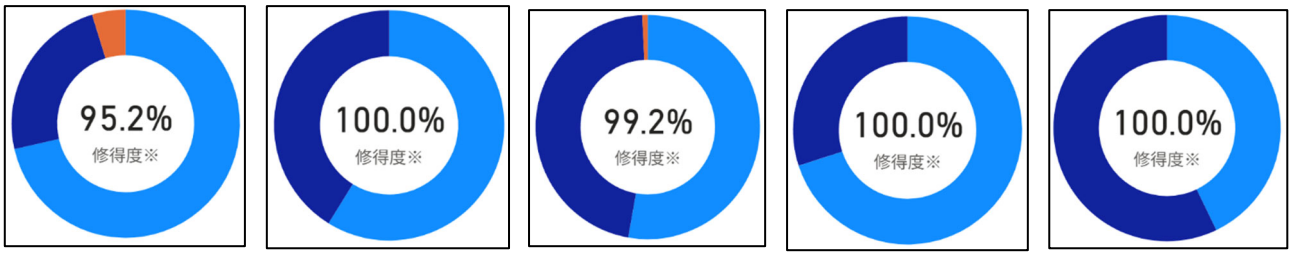
（博士前期課程）　（専門職学位課程）



⑥分析し、改善・応用する力

＜教育学研究科＞　＜経済学研究科＞ ＜システム工学研究科＞＜観光学研究科＞

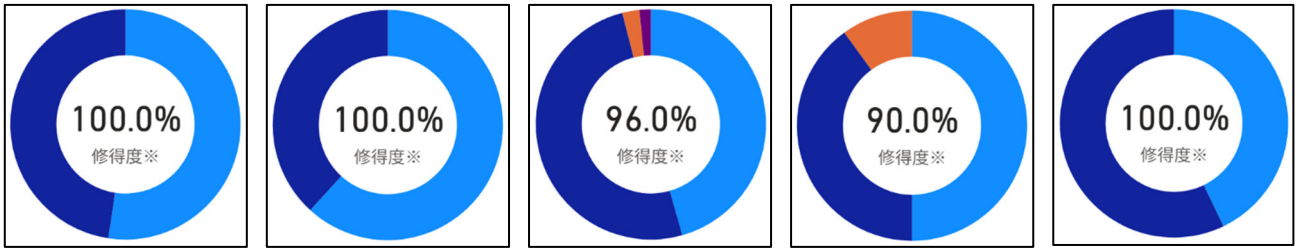
（博士前期課程）　（専門職学位課程）



⑦コミュニケーション力

＜教育学研究科＞　＜経済学研究科＞ ＜システム工学研究科＞＜観光学研究科＞

（博士前期課程）　（専門職学位課程）



※博士後期課程はアンケート対象者数が少ないため、アンケート結果を掲載していません。

【分析状況】

学部では昨年度と比較し、全ての項目で資質・能力が身についたと回答する学生の割合が大きく増加しており、いずれの学部においても、ほぼ全ての項目で 9 割以上の学生が資質・能力を身につけることができたとの実感を得ている。また昨年度、課題として浮かびあがってきた「創造力」と「ICT 機器の活用能力や情報リテラシー」についても、「創造力」は教育学部（85.1%から 95.7%）、経済学部（77.3 %から 90.5 %）、システム工学部（78.6%から 90.4 %）、観光学部（85.4 %から 88%）、「ICT 機器の活用能力や情報リテラシー」は教育学部（73.9%から 92%）、経済学部（76%から 88.6%）、システム工学部（86.6%から 96.9%）、観光学部（63.1%から 81.5%）へと向上している。そのため学生の成長実感については良好であり、この間実施してきた教育の質保証の様々な取り組みの結果であると考えられる。

研究科については、昨年度に比べやや数値が低下しているものが 3 つあるが、その他については向上し

ており、9 割近くの学生が研究科での学びを通じて成長を実感していると考えられる。また昨年度、課題となった観光学研究科の「リーダーシップを発揮する力」「平易かつ論理的に表現し、発信する力」「コミュニケーション力」についても大きく改善している。そのため学生の成長実感については良好であると考える。

＜各学部等からの分析結果＞

学部等	分析コメント
教育学部	資質・能力等の修得状況の 8 つの項目で、すべてにおいて修得度が 90%を越えている。そのうち「身についた」と高い評価を返したものが過半数に達したのは、主体性、実践力、コミュニケーション力となっている。教員養成として特に重要なこれらの点で高い評価が出ている。
経済学部	今年度の卒業生による資質・能力の修得度(自己評価)は、8 項目すべてが 80%を上回り、最も低い項目でも 88.6%と、いずれも高い水準にある。昨年度に課題として挙げ、レベルアップを図るとしていた「創造力」(90.5%)と「ICT 機器の活用能力や情報リテラシー」(88.6%)は、今年度は 8 割を明確に超える水準に達し、改善が定着した形である。すなわち、昨年度の懸案であった 2 項目が目標値をクリアした点が今年度の特徴といえる。一方で、この 2 項目は依然として 8 項目中の下位 2 つにあたり、相対的な伸びしろは残っている。「創造力」については、演習・ゼミにおける課題設定型の学修や、データ・資料をもとに自ら課題を発見し解決策を構想する機会の拡充を、「ICT 機器の活用能力や情報リテラシー」については、統計・データ分析関連科目や各科目における ICT ツールの活用場面の拡大を通じて、引き続き改善の取組を進めていきたい。最も高いのは「多角的な思考力」(98.0%)と「実践力」(97.7%)で、ディプロマ・ポリシーが掲げる資質・能力は全体として高く修得されていると評価できる。
システム工学部	昨年度と比較し、多くの項目で資質・能力が身についたと回答する学生の割合が増加している。一方、コミュニケーション能力に関しては、他学部と比べても、やや低めの割合にとどまっている。基礎的な専門知識を修得するための座学を中心とした講義が多いことが、資質・能力等の修得状況が低いことの一因であると考えられる。引き続き、学生の資質・能力等の向上を図っていく必要があると考えている。具体的には、３年次のゼミナール科目において，専門分野の知識・技能を高めるための活動だけではなく、コミュニケーション能力向上につながるディスカッション等の活動をより積極的に取り入れていくことを検討する。
観光学部	前年度よりも全体的に上昇した結果となり、総じて高い水準で身についたものと考えられる。実践型の教育プログラムや学外活動に積極的に参加する学生も多いことから、「主体性」「創造力」「実践力」「コミュニケーション力」「多角的な思考力」等の高水準の回答結果に結びついていると考えられる。また、

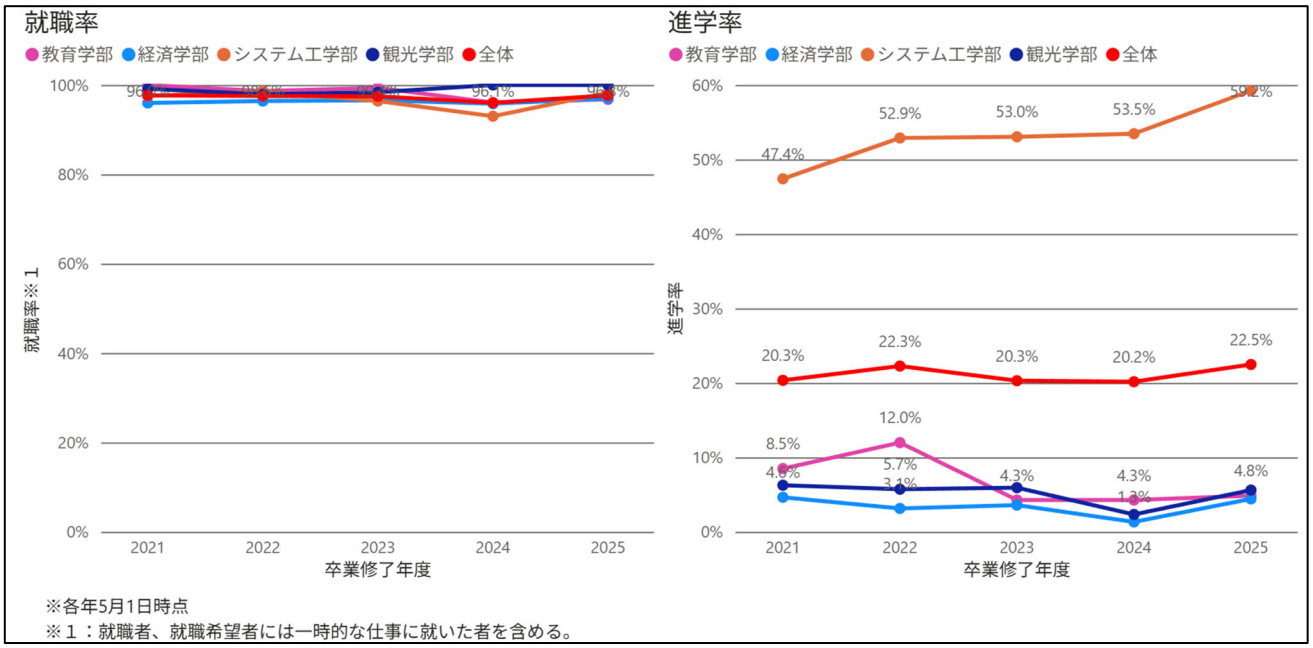
	これまで数値が低かった「ICT 機器の活用能力や情報リテラシー」についても、前年度の 63.1%から 81.5%と数値の上昇が見られた。
教育学研究科	全体として高い数値の項目が多く、その項目での数値の細かな差は実質的なものではないだろうが、特に他研究科等と比べて低めの項目として目につくのは項目 2「高い人権意識や倫理観」である。これは前年度も同じ傾向が出ていた。研究として取り上げる、学校現場での課題の難しさが反映し、誠実に回答している面もあると思われる。2026 年度から「研究倫理と研究方法」という必修科目を設定した。今後の動向を注視したい。
経済学研究科	今年度の修了生による修得度(自己評価)は、7 項目中 6 項目が 100.0%に達し、「リーダーシップを発揮する力」のみが 88.2%で唯一 100%を下回った。同項目は 8 割を超える水準を保ってはいるものの、他の 6 項目が全員「修得」と回答するなかで、唯一の相対的な弱みとして残っている。リーダーシップに関わる資質・能力が引き続き相対的な課題となりうるかを今後も注視し、その推移を踏まえて、必要に応じて演習や研究指導におけるグループでの活動・議論の機会の充実など、改善策を検討していきたい。なお、研究科は修了者・回答者数が少なく、1 人の回答が割合を大きく左右する(88.2%は概ね回答者 17 名中 15 名に相当する規模)ため、100.0%や 88.2%といった数値は小標本である点を踏まえ、経年的に確認していくことが必要である。
システム工学研究科	昨年度と比較し、多くの項目で資質・能力が身についたと回答する学生の割合が増加している。一方、リーダーシップ力に関しては、昨年度よりは改善している（77.5%→86.4%）ものの、改善の余地があると考えられる。この点も含め、カリキュラムや学生指導の改善を、継続的に検討していく。
観光学研究科	博士前期課程では、高度な専門知識や人権・倫理観、発信力、分析力など学術的技能の取得において 100%の結果が出ている。一方、課題解決能力、リーダーシップ、コミュニケーション力の部分においては、国費留学生を含む留学生の多い環境であり、日本人学生や中国人学生においても英語での論文執筆・発表にチャレンジする学生が出てきており、高めの目標設定から評価が厳しめに出たものと考えられる。 専門職学位課程でも、人権意識、発信力、分析力、コミュニケーション力の 100%を始め、その他の項目においても 80%と高い数値が表れている。

４－４　進路の決定状況等の卒業後の状況（就職率や進学率等）

大学が、就職や進学等を希望する学生に対して進路を保証できているかを明らかにするため、卒業生・修了生の就職率及び進学率を以下に示します。

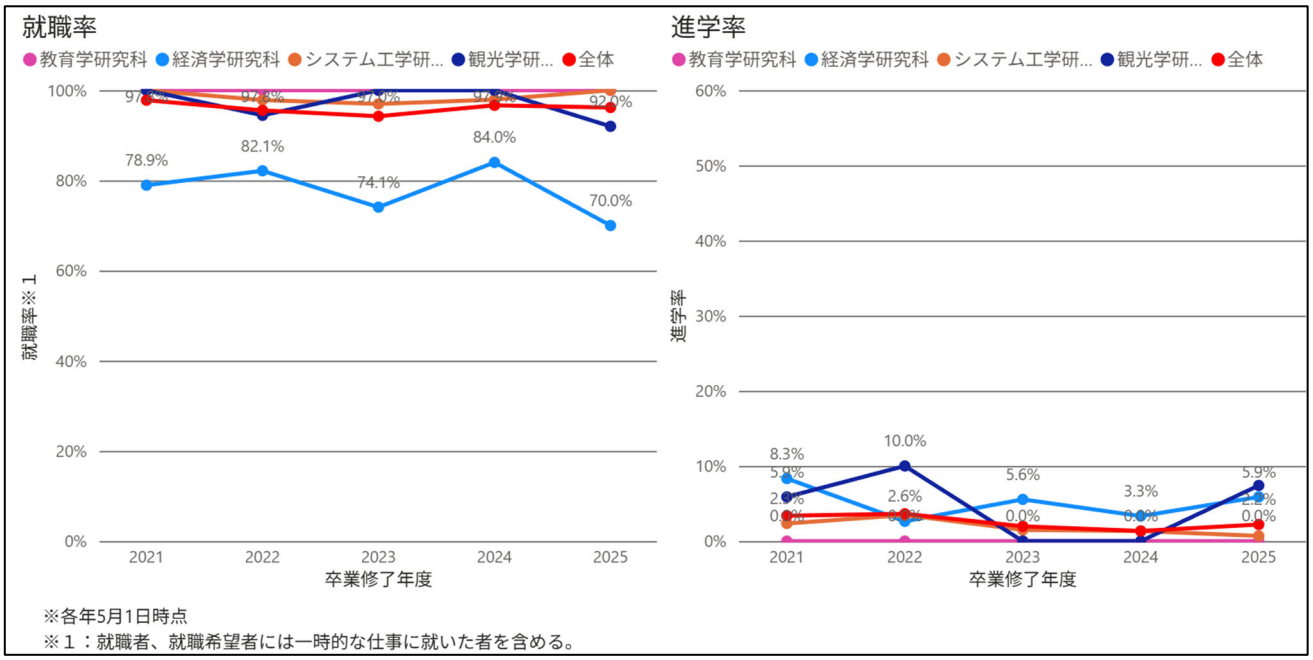
▸ 卒業生・修了生の進路状況について

＜学部＞



※各年5月1日時点
※１：就職者、就職希望者には一時的な仕事に就いた者を含める。

＜研究科＞



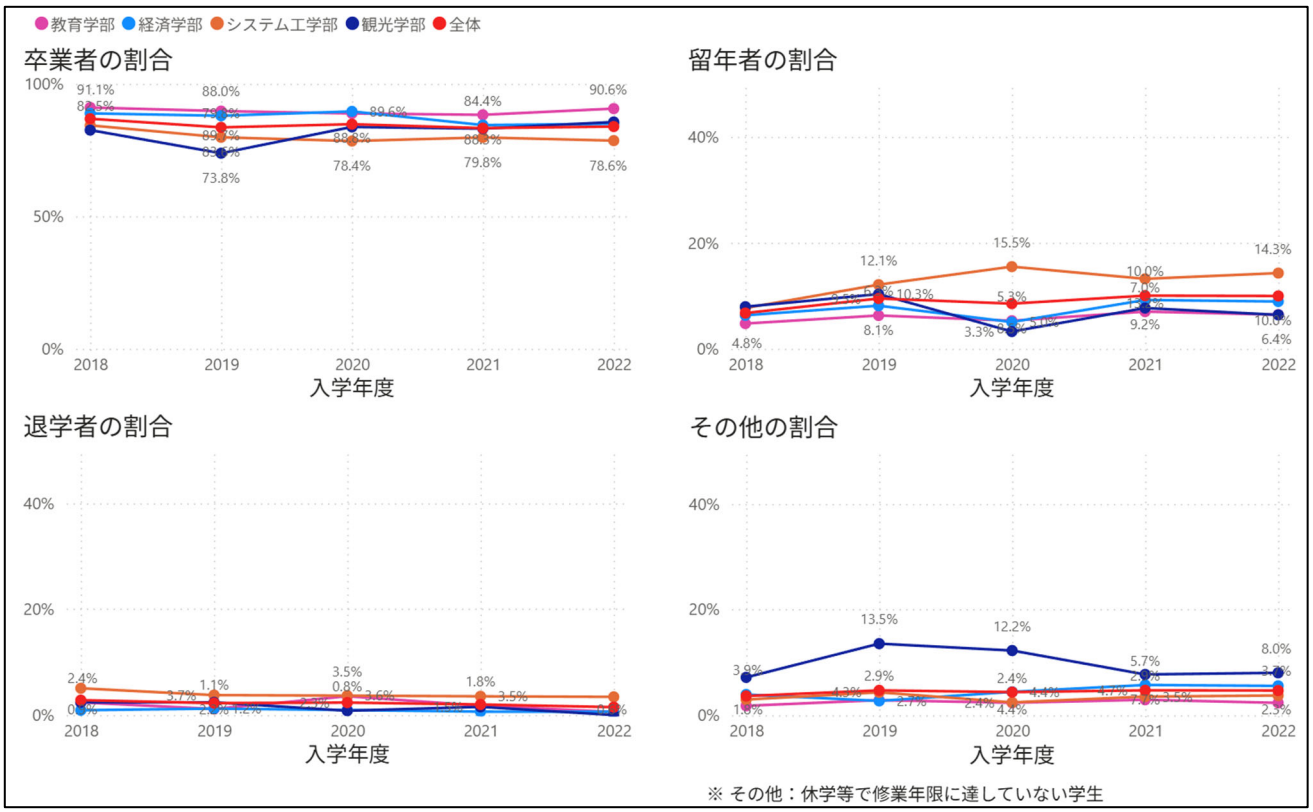
※各年5月1日時点
※１：就職者、就職希望者には一時的な仕事に就いた者を含める。

４－５　修業年限期間内に卒業する学生の割合、留年率、中途退学率

大学が、修業年限期間内において学生の資質・能力を計画的に伸ばし、学位の取得まで到達させていることを明らかにするため、修業年限期間内に卒業する学生の割合、留年率、中途退学率を以下に示します。

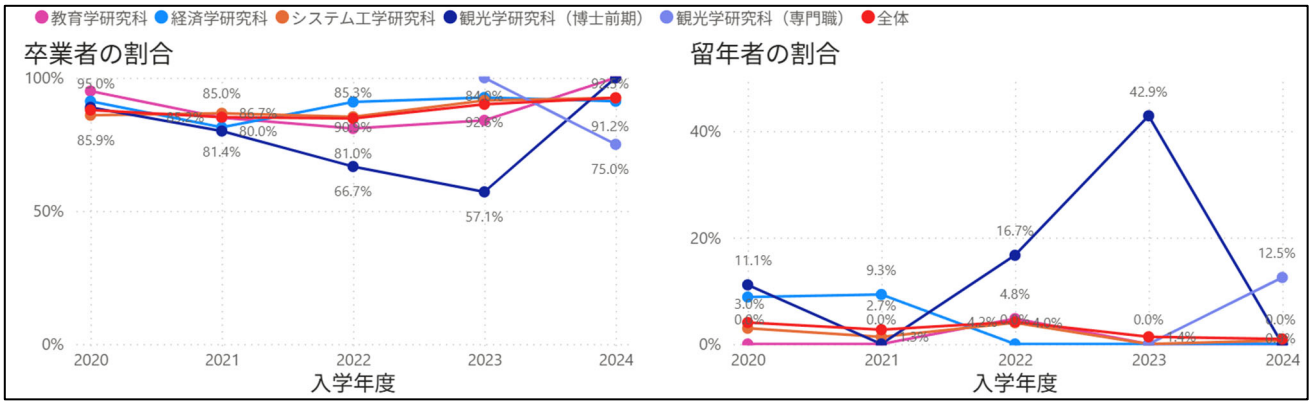
▸ 修業年限期間内に卒業する学生の割合、留年率、中途退学率

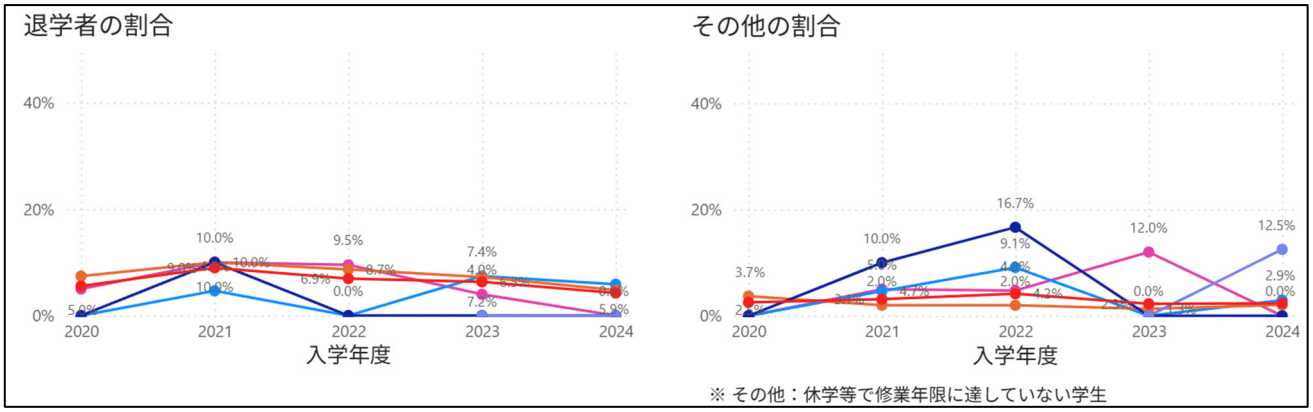
＜学部＞



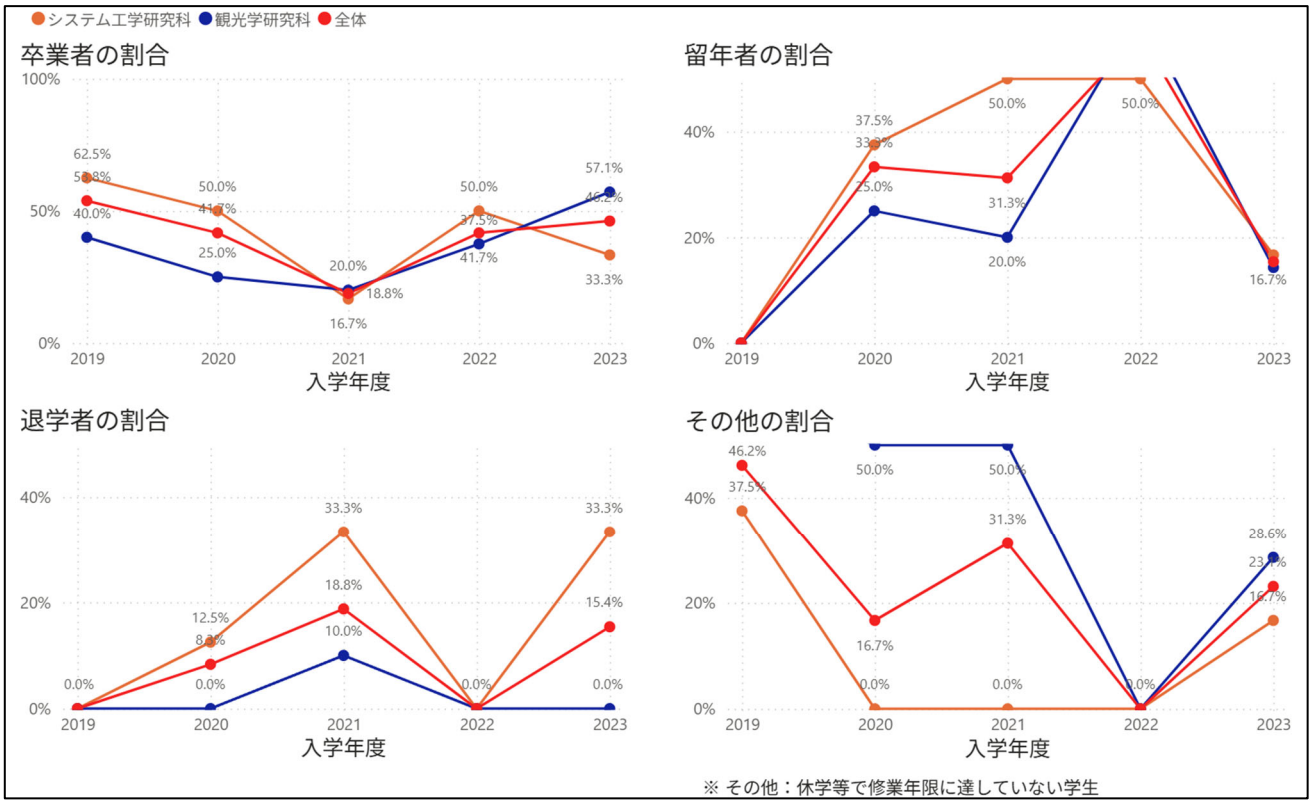
※卒業者、留年者、退学者等の割合には３年次編入者を含む。長期履修・短期履修・転学部は含まない。

＜修士・博士前期課程＞





＜博士後期課程＞



【4-4 及び 4-5 に関する分析状況】

学部生の修学年限期間内に卒業する学生の割合は、全体的に改善が見られ、留年者、退学者の数も微減している状況にある。しかしシステム工学部の退学者割合は 5 年間で平均 4%前後と他学部・学環に比べて多く、研究科でも退学者割合は比較的高い。引き続き学部 4 年間を見通した履修指導や学習支援等、ガイダンスやゼミ等での教員による指導・支援の充実、大学各部署と連携した支援体制の構築が必要である。また、経済学研究科の退学率が 2023 年 7.4%、2024 年と 5.9%とやや改善傾向にあるが、引き続き改善に向けての指導・支援を行なっていく必要がある。

＜各学部等からの分析結果＞

学部等	分析コメント
教育学部	修業年限期間内に卒業する学生の割合や就職率に大きな年変動はない。留年者、退学者について特に多くなく、これも毎年度、維持している。卒業者の割合は入学年度 2018 年度から 2022 年度まで約 90%でほぼ一定となっている。その間、留年者や退学者も低い値で一定している。これは学士（教育学）の授与者が入学定員とほぼ同じで年度を越えて一定である結果と合致する内容である。
経済学部	就職率は引き続き 9 割台後半の高水準で推移しており、ほぼ全体平均と同等の水準を保っている。経済学部の進学率は 4～5%程度(2025 年度 4.8%)と 4 学部の中でも低い部類にあり、卒業生の大半が就職を選択する就職志向が強いことがうかがえる。標準修業年限満了時の状況について、卒業者の割合は 8 割台、退学者の割合は 1%前後と低位で安定しており、2022 年度入学の世代まで含めて、標準修業年限内での学修は概ね順調に進んでいるといえる。
システム工学部	就職率については、90%前後で推移しており、他大学(全国)の工学系学部の就職率よりも 1～4%程度高く、学部での教育が企業等により一定の評価を受けている結果であると考えている。一方、就職先が決まらずに卒業した学生に対しては、キャリア支援室にて相談窓口を設けており、在校生と同様にキャリアカウンセラーが就職活動を支援している。 卒業者の割合は他学部と比べてやや低いが、全国の工学系大学の卒業率はおおよそ 80%であるため、全国平均と同程度と思われる。退学者の割合は他学部と比べてやや高い。全国の工学系大学の退学者の割合はおおよそ 2%である。5 年間の平均で見ると 4%程度であるので、全国平均よりもやや高い傾向と思われる。本学部は後期入試で入学する学生が他大学よりも多く、進路を再考する学生も一定数いるための傾向であると考えている。メンタルに問題を抱えている学生が一定数いるため、キャンパスライフ・健康支援センターと協力して対応している。
観光学部	いずれの年も高い就職率を維持している。また、留年者の割合、退学者の割合とも特に目立った傾向は見られない。また、海外留学等を理由に休学する学生の存在が影響し、他学部と比較して「その他の割合」が多い傾向が見られるが、2021 年度入学者では減少が見られ、他学部の水準に近づいている。大学院進学者の割合は高くないが、説明会の開催など、進学というキャリア選択があることの周知活動を続けている。
教育学研究科	留年者や退学者が他研究科等と比べて多いわけではないが、大学院生の母数が小さいため、一人でも留年・退学すると割合の変動が出やすくなっている。今後も、少人数であることを活かし、履修等への丁寧な指導やサポートを引き続き行いたい。

経済学研究科	就職率は、2021 年度から 2025 年度にかけて 78.9%、82.1%、74.1%、84.0%、70.0%と年度による変動が大きく、2025 年度は過去 5 年間で最も低水準であった。本研究科では留学生の割合が比較的高く、学位取得と就職先の確保を両立する必要があることから、就職率に影響している可能性も考えられるため、今後も推移を注視したい。 標準修業年限満了時の状況については、昨年度、他研究科と比べて留年者の割合がやや高い点を課題として挙げたが、昨年度の 7.4%から今年度は 5.9%に低下している。学位取得に向けた支援の効果が表れている可能性も含め、引き続き推移を確認したい。
システム工学研究科	前期：就職率は 97～99%であり、全国の工学系研究科の就職率（約 93%）よりも高い。研究科での教育が企業等により一定の評価を受けている結果であると考えている。平均修了率が学部の卒業率に比べ高くなっており、また、平均留年率は学部のそれよりも低くなっている。これらの傾向は、大学院 2 年間の研究指導により、学生の資質・能力を伸ばし、学位の取得まで到達できた結果と考えられる。 後期：後期課程の人数が少ないため、各個人の動向が反映された結果と考えている。修業年限期間内に学位を取得できた学生の割合が低いことについては、厳格な博士号審査が行われていることが一つの要因として考えられる。ただし今後、修業年限期間内に学位を取得できるような指導を行うように努める必要がある。
観光学研究科	博士前期課程について、2023 年度入学者の留年者の割合が目立って高くなっているが、2024 年度入学者では低い水準に収まっている。もともとの定員が少ないため、少数の学生の動向が反映されたものと考えられる。

▸ **学位取得に要した年数ごとの修了者の割合について**

※各年度末日（3 月 31 日）時点

修了年度

2025

大学院課程	標準修業年限	1年	2年	3年	4年	5年	5年以上
教育学研究科（専門職）	2年		76.2%	23.8%			
経済学研究科（修士）	2年		91.2%	2.9%		2.9%	2.9%
システム工学研究科（博士前期）	2年		98.5%	1.5%			
観光学研究科（博士前期）	2年		66.7%	25.0%	8.3%		
観光学研究科（専門職）	2年		100.0%				
システム工学研究科（博士後期）	3年			50.0%	50.0%		
観光学研究科（博士後期）	3年			25.0%	25.0%		50.0%

※休学および長期履修・短期履修を含む。

【分析状況】

母数が少ないため割合が大きく見えると各研究科から分析がなされているが、退学率を合わせてみると、経済学研究科 5.9%、システム工学研究科 4.8%となっており、標準修了年限を見通した修学指導が必要である。学修ポートフォリオの活用等によって、修学状況の把握や院生へのきめ細やかな指導や支援の充実が引き続き求められる。

＜各学部等からの分析結果＞

研究科	分析コメント
教育学研究科	大学院生の中には、免許取得のために 1 年目を使い、2 年目と 3 年目に教職大学院としての学修を積む形の長期履修制度の者が一定数いる。e-annual report のデータは、その点を反映したものになっている。大学院で学修や実習に困難がある院生も少なくないが、教員全員が集まる専攻会議でひとりひとりへの丁寧な対応を頻繁に検討しており、引き続きその努力を続けたい。
経済学研究科	2025 年度の修了者をみると、標準修業年限である 2 年で学位を取得した学生が 91.2%を占め、引き続き大多数が標準的な年限で修了している。標準修業年限を超えて修了した学生も少数みられるが、本集計には休学および長期履修が含まれており、入学当初から休学や長期履修を想定している学生もいることから、これらの長期化は必ずしも学業上の遅滞を意味するものではなく、単純に学生が滞留しているわけではない。該当する少数の学生については、それぞれの状況に応じた個別の修学支援を行うとともに、修学状況の把握に努めていく。

システム工学研究科	前期：ほとんどの学生が標準修業年限で修了できている。標準修業年限を超えている学生もいるが、該当数は数名であり、個別の学生の状況に寄っているものと考えている。個々の事情に応じた、きめ細かな指導を今後も続けていく。 後期：学生数が少ないため、個別の学生の状況によるところが大きいと考えられる。修業年限期間内に学位を取得できるような指導を行うように努める必要がある。
観光学研究科	博士前期課程については、修了に 3 年を要した学生の割合が高く見えるが、全体の定員が少なく、少数の学生の動向が反映されたものと考えられる。 博士後期課程については、2025 年度には 5 年以上での学位取得者が 50%となっている。早期修了のために、カリキュラムや学位取得プロセスの検討、認識の共有を進めている。

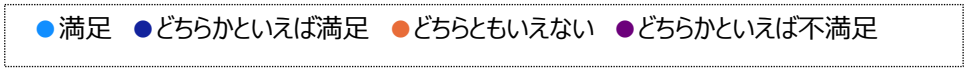
４－６　卒業生からの評価

学位プログラムを通じて身に付けた資質・能力が、進学先や就職先でどのように役立っているかを、進学・就職から一定期間経過した卒業・修了生からの評価により明らかにするため、アンケートを実施しています。令和７年度に実施したアンケートの概要については、以下のとおりです。

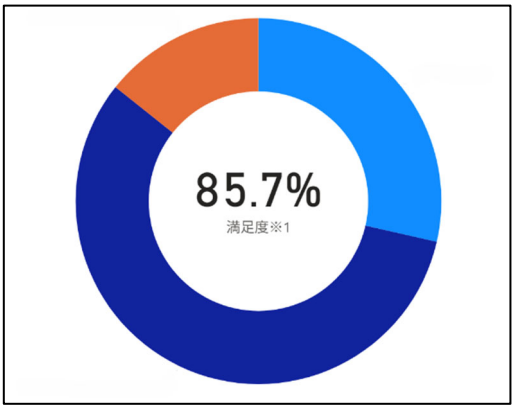
アンケート対象：令和３年度卒業生・修了生（卒業・修了から３年経過）
実施期間：令和８年１月１日～１月３１日
実施方法：はがき郵送による案内、アンケートフォームによる回答
回答率　：11.2%（卒業・修了者数からはがき未着数を除いた数を分母とした）

▸ **和歌山大学の教育内容全体に対する満足度について**

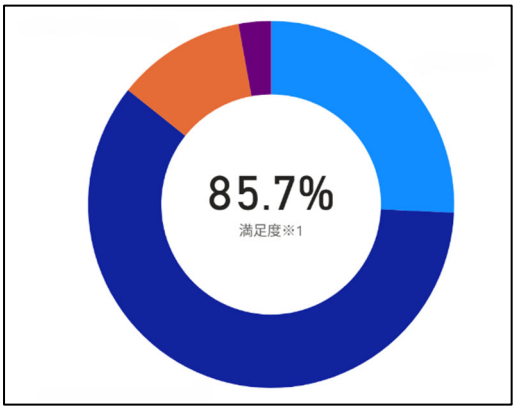
※：満足度＝「満足」および「どちらかといえば満足」の回答数／全回答数×100〔%〕
端数処理により、各選択肢の合計と一致しない場合有り。



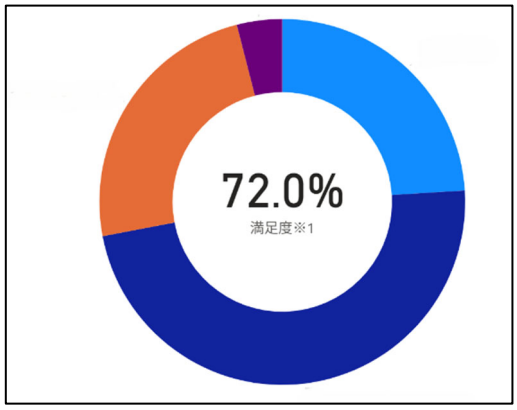
＜教育学部＞



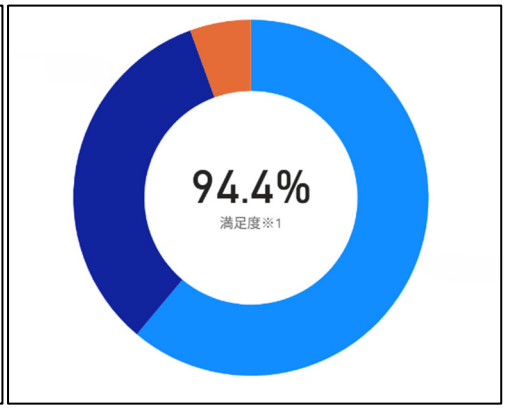
＜経済学部＞



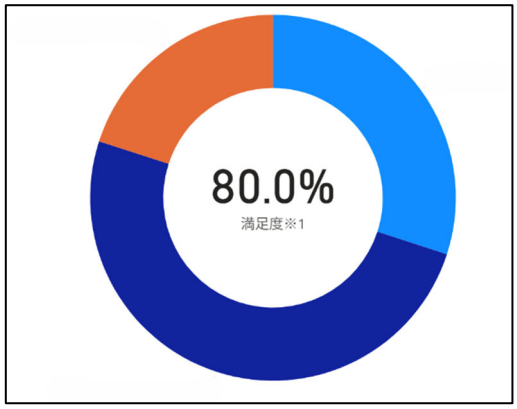
＜システム工学部＞



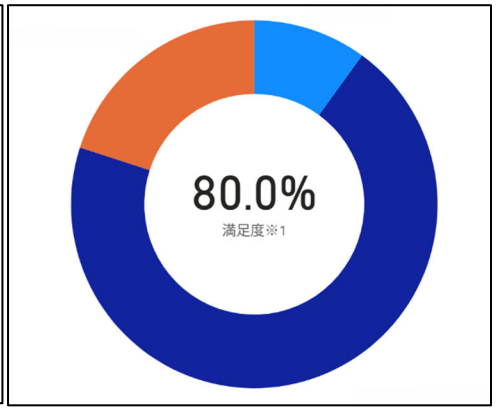
＜観光学部＞



＜教育学研究科＞



＜システム工学研究科（博士前期課程＞



※経済学研究科および観光学研究科（博士前期課程）は回答者なしのため掲載していません。また、博士後期課程はアンケート対象者数が少ないため、アンケート結果を掲載していません。

【分析状況】

アンケートの回答率が減少しており、経済学研究科および観光学研究科（博士前期課程）は回答者なしのため分析できない状況に陥っている。引き続き、回答率を上げるための工夫を考える必要がある。また、システム工学部の満足度が下がっており、他学部と比較しても低いことから、学部としてのより詳細な分析と対応が求められる。

＜各学部等からの分析結果＞

学部等	分析コメント
教育学部	満足度は大学全体でのものと似た結果となっている。前年度は、他学部等と比べて満足度がやや低い結果となっていたのは、COVID-19 による影響と考えていたが、今回は、その状況を脱したことが、満足度の回復につながったのかもしれない。様々な事態に柔軟に対応できる資質・能力を育てられるよう、引き続き、学生への指導を行いたい。

経済学部	回答数が限られるため解釈には留意が必要であるが、2025 年度の卒業生による満足度(「満足」＋「どちらかといえば満足」)は 85.7%で、引き続き 8 割台後半の高い水準にある。昨年度(88.2%)からはわずかに低下したものの、回答者数が少なく 1 人の回答が割合を大きく左右することを踏まえれば、有意な低下とは言いがたく、おおむね同水準を維持しているとみるのが妥当である。卒業生が在学時の教育内容をより積極的に評価できるよう、引き続き教育内容の充実を図っていきたい。
システム工学部	全体の満足度が昨年度に比べて低下している（83.3%→72.0%）。アンケートの回答率が低いため分析するのが難しいが、今回のアンケート対象者（令和 3 年度卒）は、 3 年次（令和 2 年）に COVID-19 の影響を受けたことで、教育課程において極めて重要な位置を占める実験等の専門科目がすべてオンラインとなってしまったことも満足度を下げた要因ではないかと考えている。また、卒業時に比べ卒業後のアンケートで満足度が下がる傾向が見受けられることに関しては、卒業後に社会で活動していく中で、在学時に学んでおけばよかったと感じることが出てくることがあるのではないかと分析している。社会ニーズにあったカリキュラムに向けた改善をしていくことも含め、引き続き学生の満足度を上げるために丁寧な指導を行いたい。
観光学部	「満足」と「どちらかといえば満足」をあわせると 94.4%と高い水準となっている。前年度（96.3%）と同水準であり、不満足の回答は見られないことから、満足度の水準は総じて高いものと推察できる。
教育学研究科	満足度は他研究科等と同様の水準であり、前年度の 75.0%から 80.0%に回復した。ただし、母数が小さいため、こういった割合の上下が見えやすいところがある。学校での実際の課題から研究を起こしており、それらは困難な課題も多い。それらに対して高い基準で評価を行っていることがこの結果の原因の一つかもしれないが、引き続き、院生の満足度を上げるために丁寧な指導を行いたい。
システム工学研究科	全体の満足度が昨年度に比べて若干低下している（82.6%→80.0%）。アンケートの回答率が低いため分析するのが難しいが、引き続き院生の満足度を上げるために丁寧な指導を行いたい。

▸ **和歌山大学での学びを通して身についた①～⑦の資質や能力が、仕事や日常生活の中で役立っていますか。**

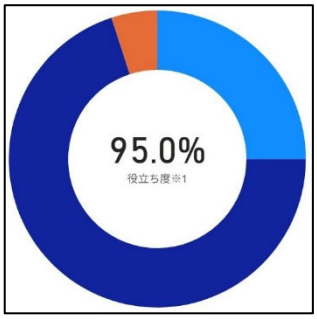
※：役立ち度＝「非常に役に立っている」と「どちらかといえば役に立っている」の回答数／全回答数×100〔%〕
端数処理により、各選択肢の合計と一致しない場合有り。

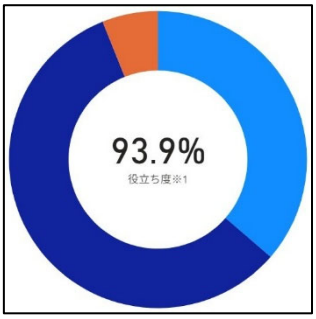
●非常に役に立っている ●どちらかといえば役に立っている ●あまり役に立っていない ●役に立っていない

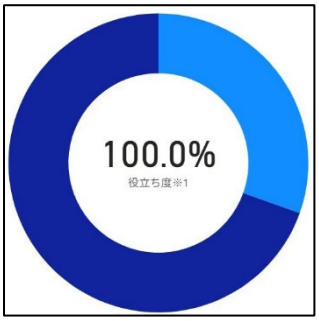
（学士課程）

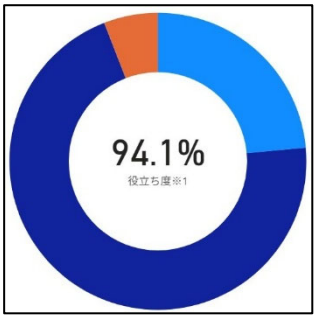
① 幅広い教養や倫理性

＜教育学部＞ ＜経済学部＞ ＜システム工学部＞ ＜観光学部＞



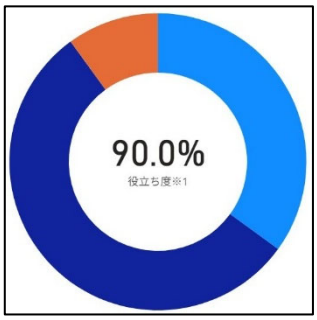


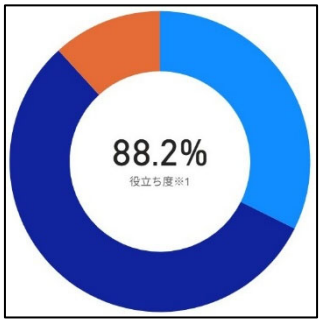


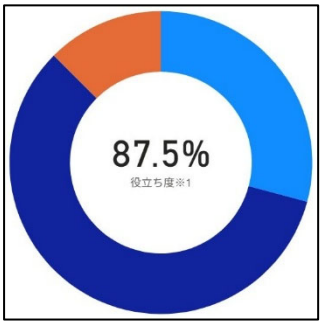


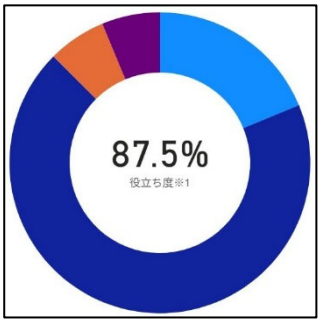
②知識や学力

＜教育学部＞ ＜経済学部＞ ＜システム工学部＞ ＜観光学部＞



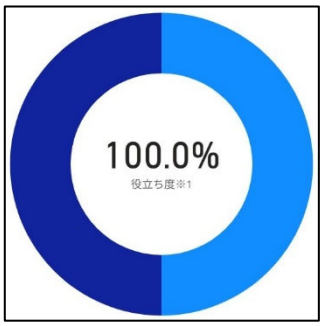


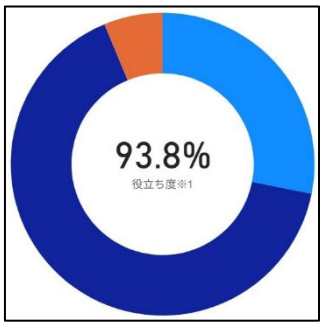


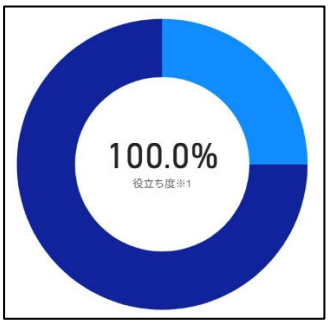


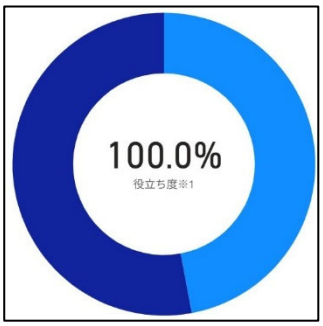
③主体性

＜教育学部＞ ＜経済学部＞ ＜システム工学部＞ ＜観光学部＞





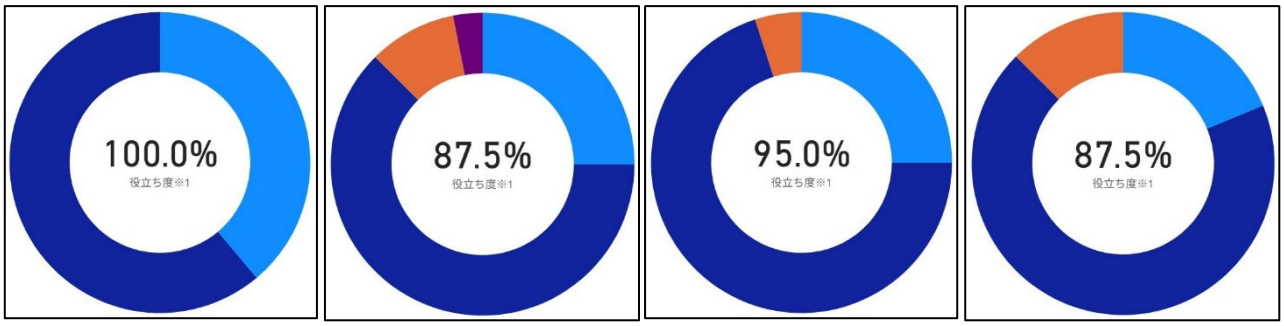




●非常に役に立っている ●どちらかといえば役に立っている ●あまり役に立っていない ●役に立っていない

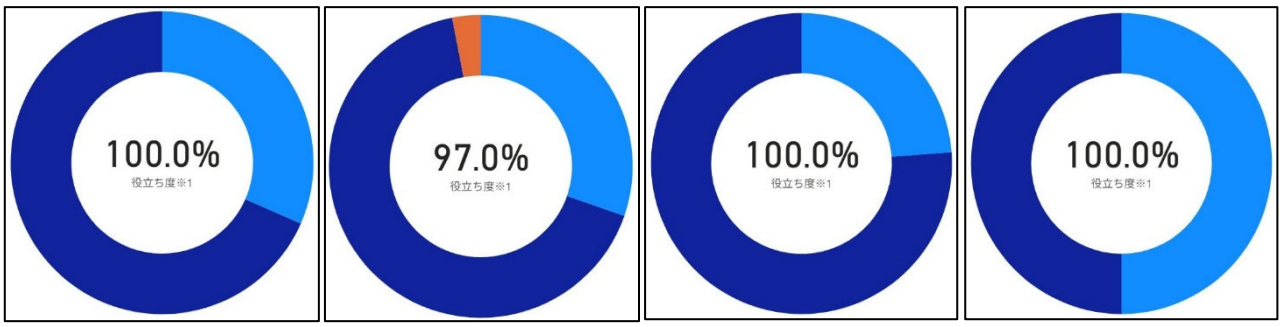
④創造力

＜教育学部＞ ＜経済学部＞ ＜システム工学部＞ ＜観光学部＞



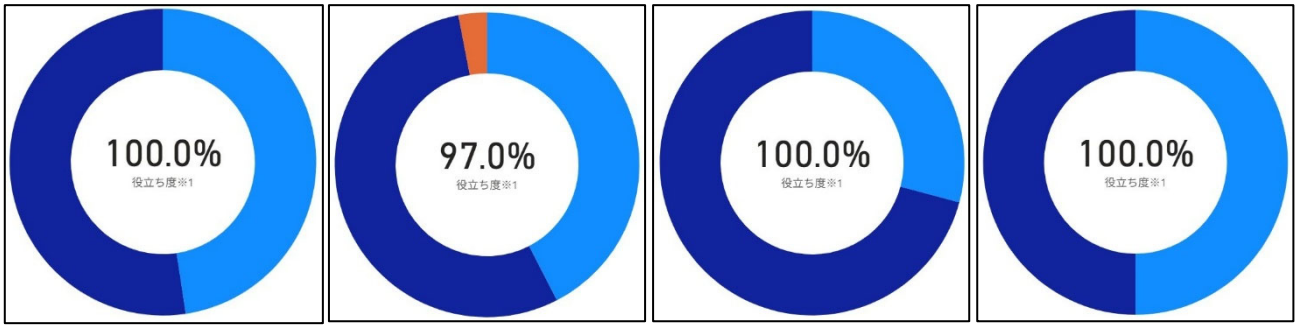
⑤実践力

＜教育学部＞ ＜経済学部＞ ＜システム工学部＞ ＜観光学部＞



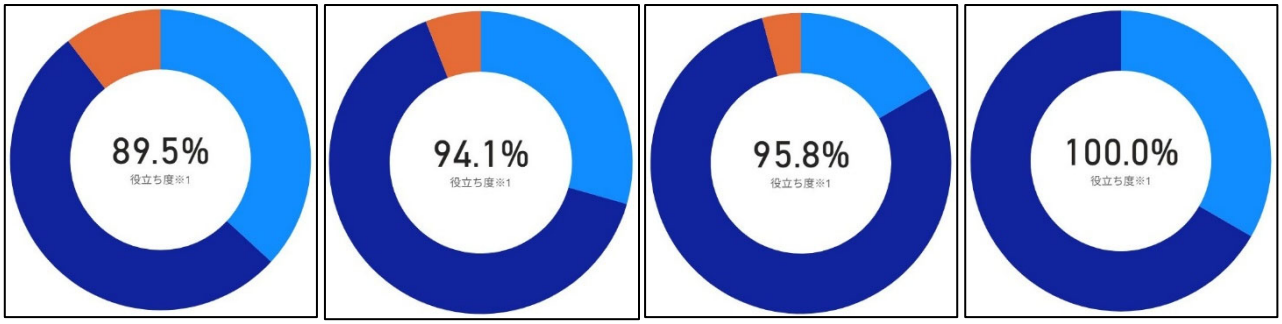
⑥コミュニケーション力

＜教育学部＞ ＜経済学部＞ ＜システム工学部＞ ＜観光学部＞



⑦多角的な思考力

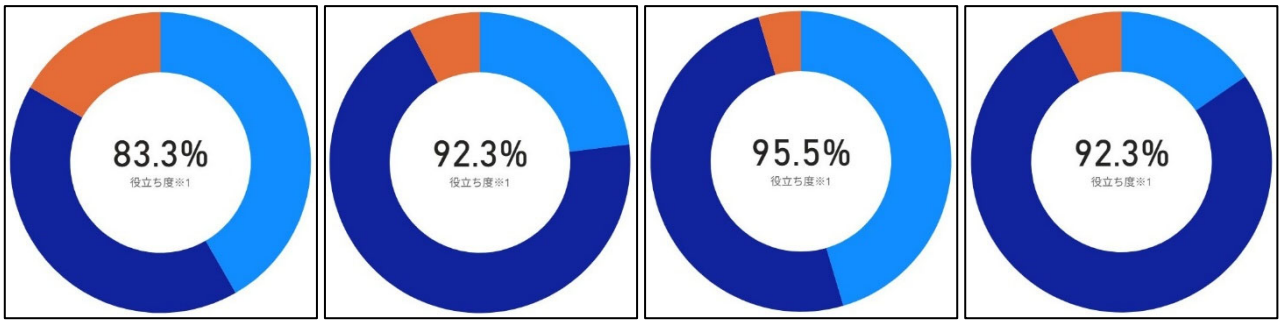
＜教育学部＞ ＜経済学部＞ ＜システム工学部＞ ＜観光学部＞



●非常に役に立っている ●どちらかといえば役に立っている ●あまり役に立っていない ●役に立っていない

⑧ICT 機器の活用能力や情報リテラシー

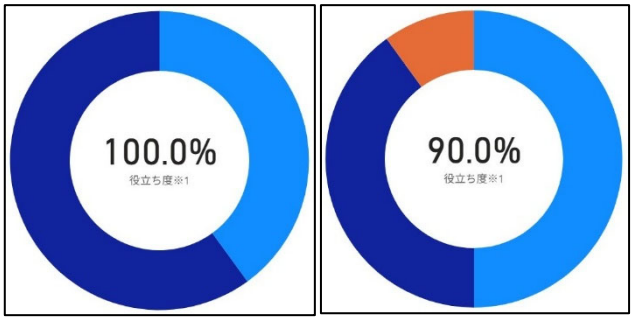
＜教育学部＞ ＜経済学部＞ ＜システム工学部＞ ＜観光学部＞



（修士・博士課程）

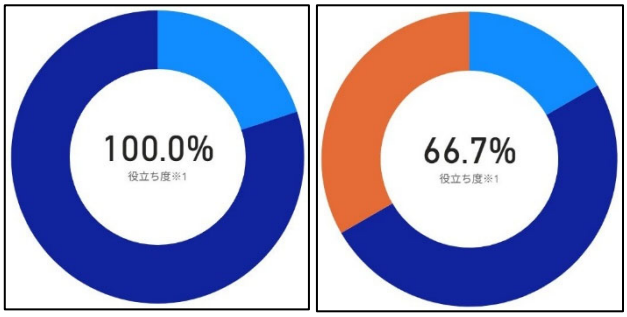
①高度な専門知識を獲得し、それを深める力

＜教育学研究科＞ ＜システム工学研究科＞



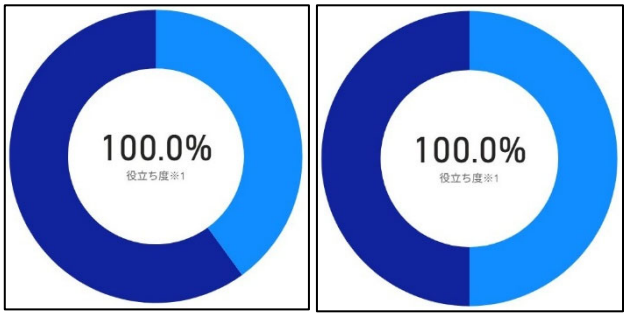
②高い人権意識や倫理観

＜教育学研究科＞ ＜システム工学研究科＞



③課題解決能力

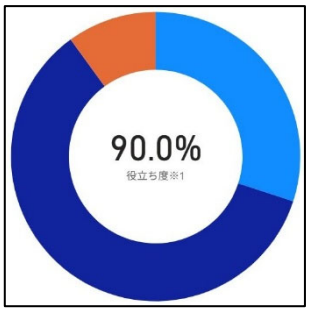
＜教育学研究科＞ ＜システム工学研究科＞

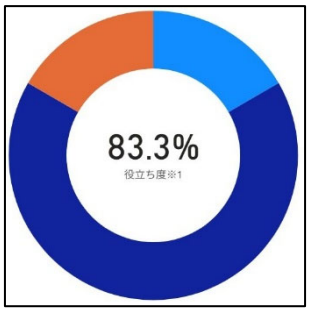


●非常に役に立っている ●どちらかといえば役に立っている ●あまり役に立っていない ●役に立っていない

④リーダーシップを発揮する力

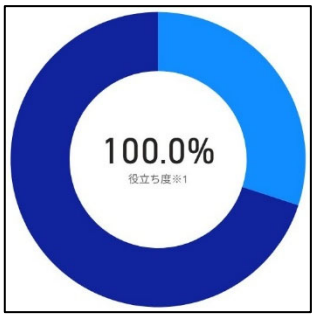
＜教育学研究科＞ ＜システム工学研究科＞

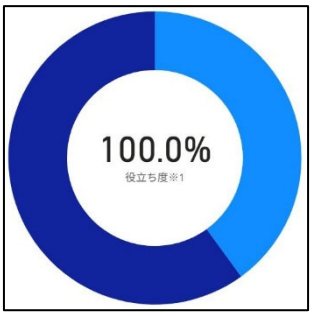




⑤平易かつ論理的に表現し、発信する力

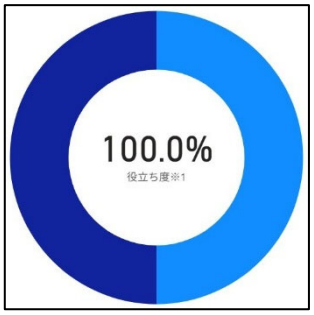
＜教育学研究科＞ ＜システム工学研究科＞

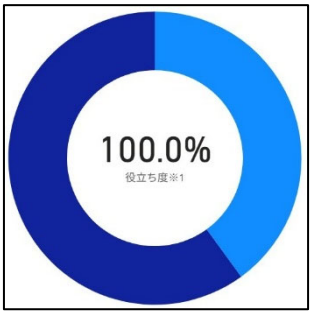




⑥分析し、改善・応用する力

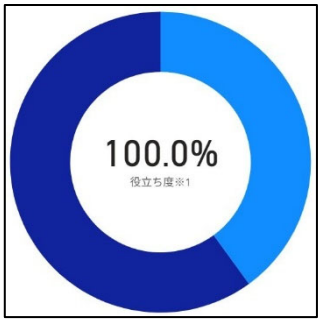
＜教育学研究科＞ ＜システム工学研究科＞

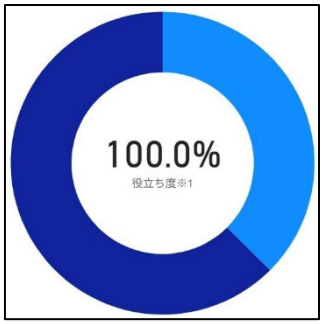




⑦コミュニケーション力

＜教育学研究科＞ ＜システム工学研究科＞





※経済学研究科および観光学研究科（博士前期課程）は回答者なしのため掲載していません。また、博士後期課程はアンケート対象者数が少ないため、アンケート結果を掲載していません。

【分析状況】

4学部共通して「⑧ICT機器の活用能力や情報リテラシー」についての「役立っている」という回答が昨年度より下がっている。技術の進化に伴い学部での学修内容ではカバーできない能力だと考えられるため、リスキリングや学び続けるための資質・能力である「主体性」や「実践力」の育成とともに、学び直したい卒業生のために、大学院のコースやプログラムの提供等も検討していく必要がある。

また上述した通り、経済学研究科および観光学研究科（博士前期課程）は回答者なしのため分析できない状況に陥っており、質保証のための検証が十分でない状況である。回答率の上昇に向けた個別的なアプローチも検討すべき段階に入っている。

＜各学部等からの分析結果＞

学部等	分析コメント
教育学部	おおむね良好な結果だが項目7「多角的な思考」や項目8「ICT機器の活用能力や情報リテラシー」で他学部等より低くなっているのが目立つ。ICT活用に関しては他の章でも同じ傾向が出ている。前年度は項目3「主体性」が低めに出ていたが、今回は、それは出ておらず、良好な結果に見える。教育学部では教員を目指す学生のための環境整備として、在学生と卒業生をつなぐプラットフォームの構築を進めており、そのシステムを活用し、卒業生からの声をより拾えるように進めたい。
経済学部	回答者数が少なく、解釈には留意が必要であるが、2025年度の卒業生による役立ち度(「非常に役に立っている」＋「どちらかといえば役に立っている」)は、8項目すべてで87.5%以上となり、和歌山大学での学びが仕事や日常生活に役立っているとの評価は、全体として高い水準にある。項目別にみると、最も高いのは「実践力」と「コミュニケーション力」(いずれも97.0%)で、就業後に直接結びつきやすい実践的・対人的な能力がとりわけ役立っていると受け止められている。一方、相対的に低いのは「創造力」(87.5%)と「知識や学力」(88.2%)である。講義や演習を通じて、知識・学力や創造力といった、時間をかけて培われる資質・能力を意識的に育てていくことが、役立ち度のさらなる向上につながると考えられる。なお、分析結果の信頼性向上のためには、卒業生アンケートの回答率向上が望まれることから、大学全体として卒業生との継続的なつながりを維持し、回答しやすい調査環境の整備について検討していくことが期待される。
システム工学部	どの項目についても「非常に役に立っている」「どちらかといえば役に立っている」との回答が大部分であり、多くの卒業生が役に立っていると評価していることがわかる。引き続き卒業生の満足度を上げるために丁寧な指導を行うとともに、回答率の向上のために、学部の同窓会にも協力を依頼することを検討する。

観光学部	主体性、実践力、コミュニケーション力、多角的な思考力で100%となっており、アクティブラーニングやゼミでの多様な取り組みの成果が表れているものと考えられる。その他の項目も87.5%以上の高水準となっており、学部での学びや身についた資質が就職先や進学先においても少なからず活かされていることが窺える。今後、回答率向上のため同窓会との連携を図っていくことにしたい。
教育学研究科	前年度は項目6「分析し、改善・応用する力」が低めに出ていたが、今回は、それは見られない。
システム工学研究科	ほとんどの項目について「非常に役に立っている」「どちらかといえば役に立っている」との回答が大部分であり、多くの修了生が役に立っていると評価していることがわかる。他方、「高い人権意識や倫理観」の項目が他項目と比べやや低い。令和4年度より、「技術者倫理」を必修として新たに開講し、さらに令和6年度には内容を刷新している。また、令和6年度から研究倫理教育を毎年実施しているので、徐々に評価が改善していくと期待される。

４－７　卒業生に対する評価

企業等に採用された本学卒業生が学位プログラムを通じて身に付けた資質・能力等について、合同企業説明会参加企業にアンケートを実施しています。令和７年度に実施したアンケートの概要については、以下のとおりです。

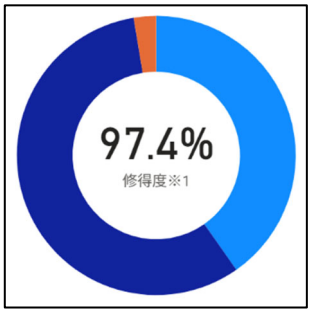
アンケート対象：2027 卒向け和歌山大学合同企業説明会参加企業
実施期間：令和８年２月～3 月
実施方法：Microsoft Forms のアンケート機能による実施
回答企業数：101 社（うち、本学卒業・修了生が在籍している企業 85.1%）

▸ **採用された和歌山大学卒業生が、次の資質や能力を身につけていると思いますか。**

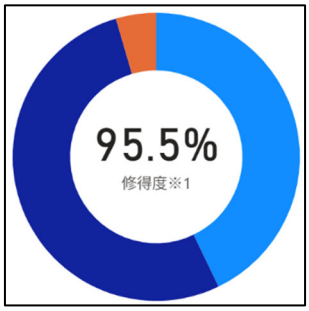
※：修得度＝「身につけている」と「ある程度身につけている」の回答数／全回答数×100〔%〕
端数処理により、各選択肢の合計と一致しない場合有り。



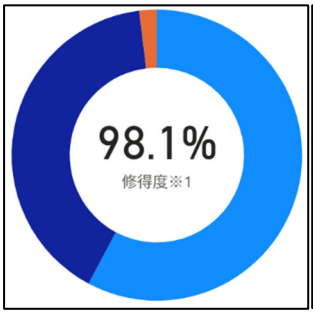
①幅広い教養や倫理性



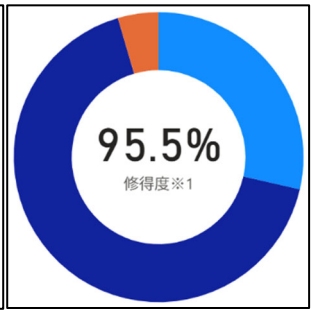
②知識や学力



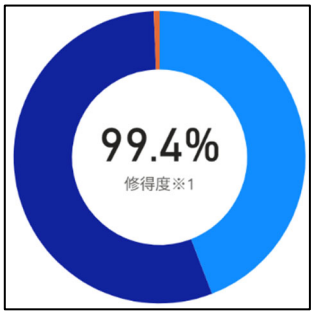
③主体性



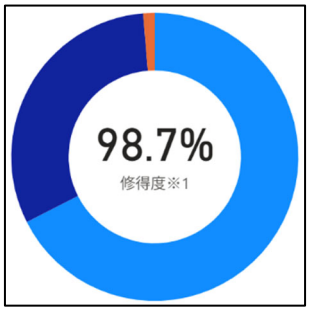
④創造力



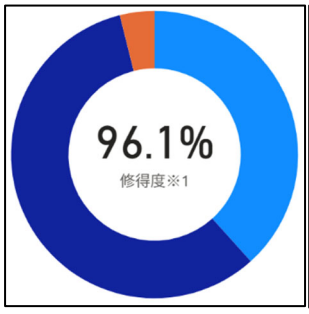
⑤実践力



⑥コミュニケーション力



⑦多角的な思考力



⑧ICT 機器の活用能力や情報リテラシー

